

Civilizations

No.22 2017

Contents

iii
Preface
Kazushige Yamamoto

1
Discussion about the study and thought in 20th century
Tsuneo Yasuda

13
**Reinterpretation on the Concept of "Modern" in the History of Curriculum Studies:
Focusing on Trend in the American Social Studies Curriculum in the Early 20th Century**
Jinichiro Saito

25
**Reproduction of Ancient Egyptian sulfur necklace:
As an Example of Interdisciplinary Collaboration**
Kyoko Yamahana and Yasunobu Akiyama

35
**The Reseach Report of Core-Project:
An Essay on the Introduction of Environment-Related QOL**
Yoichi Hirano and Takuo Nakashima

文明

No.22 2017



文明

Civilizations

東海大学文明研究所

Institute of Civilization Research, Tokai University



No.22 2017

iii
社会史と教育運動
山本和重

1
20世紀学問思想論
安田常雄

13
カリキュラム研究史に見る「近代性」に関する一考察
——20世紀前半の米国社会科教育史に焦点を当てて——
斉藤仁一朗

25
東海大学古代エジプト及び中近東コレクション所蔵の
硫黄ビーズ製ネックレス復元研究
——本学における文化財保存修復のモデルケースとして——
山花京子, 秋山泰伸

35
コア・プロジェクト「森里川海研究」の方向性
——環境QOLの導入の一試論として——
平野葉一, 中嶋卓雄

東海大学文明研究所



文明
Civilizations

No.22 **2017**

東海大学文明研究所

社会史と教育運動

本研究所の研究プロジェクトとして、2016年度から「20世紀人文学の方法論的再検討」が始まった。私は、プロジェクト・リーダーとして第1回の研究会で、歴史学の分野から報告を行い、『文明』の前号に「20世紀人文学の方法論的再検討のための試論—歴史家黒羽清隆をてがかりとして—」として発表した。その内容は、副題にある通り、日本近現代史家で、また長く中学校社会科教師として教育運動に携わった、黒羽清隆（1934～1987）の仕事を手がかりとして、20世紀における歴史学研究の方法を検討したものである。主な論点は、①「現代歴史学」と表現する場合、「現代」の範囲が、1990年代の言語論的転回以後として理解されることが多いが、科学主義的実証主義的歴史学（人文学）への批判という文脈でみた場合、「現代」をもっと広い範囲で、20世紀以降における新たな研究の潮流として理解すべきではないか。1970年代の社会史研究もそうした文脈で理解すべきでないか。②日本の社会史研究に着目した場合、注目すべき歴史家として黒羽清隆がいる。黒羽の学問研究の方法は、1950年代の国民的歴史学運動の経験を基礎とするものであり、同時に柳田国男の民俗学の影響が著しい。黒羽の学問の方法論に着目した場合、1920・30年代の柳田の郷土史学・民俗学、1950年代の国民的歴史学運動、1970年代の社会史研究を「現代歴史学」の一つの系譜として理解できるのではないか、というものであった。「ないか。」という文言が続くように、またタイトルにもあるように、内容は初歩的な「試論」にとどまる。プロジェクトはその後、研究会を重ね、今号にも、神奈川大学教授安田常雄氏の公開研究会での講演内容や、本学課程資格教育センターの齊藤仁一朗氏の論文が掲載されている。

本稿では、私的な経験を交えつつ、社会史について考えているところを記したい。

前稿で考察の手がかりとした黒羽清隆にとっては、国民的歴史学運動を提唱した石母田正の『歴史と民族の発見』が、学生時代のバイブル的存在であったという。私が研究者の道を歩みはじめたのは1980年代であるが、私自身にとっては、黒羽の『十五年戦争史序説』（三省堂、1979年）が、バイブル的存在であった。その著作の「方法的な序説」において黒羽は、「民衆の社会史的な生態と意識との追求あるいは描写に、相対的なウエイトをかけ」、それにより「民衆闘争史の視座が欠けていること」を自身の「史論の弱点」としつつ、「しかし、あえて「五分の魂」の方からいえば、ここでの私は、民衆闘争史を論じないという、いわば「身銭」をきって、戦争の民衆「疎外」と民衆の戦争「疎外」という矛盾的構造にメスをいれようとしたのである。」（傍点は原文）と「見得」を切っている。しかしながら、「民衆闘争史」や「社会運動史」においても、「民衆の社会史的生態と意識との追求」が求められるのではないか、これが、研究者の卵であった私にとっての「問い」であった。そうした関心から、修士論文では、昭和恐慌期・満州事変期における労働組合の中堅層や下部組織の動向を研究対象とした。その際に参考にできたのは、日本を対象としたものでは、二村一夫の「全国坑夫組合の組織と活動」(1)～(3)（1970年～72年）くらいであった。そのため、ウエップ夫妻の『労働組合運動の歴史』上下、とくに第8章の「労働組合の世界」や、ホブズボームの『イギリス労働史研究』などのイギリス労働運動史研究を参照することが多かった。ちなみにE・P・トムスの*Making of the English Working Class*はいまだ邦訳されておらず、*Past & Present*誌掲載のモラル・エコノミーに関する論文*The moral Economy of the English Crowd in the Eighteenth Century*を、おぼつかない語

学力で読んでいた程度であった。そしてウエップ夫妻やホブズボームの著作とともに読んでいたのが、R・H・トーニーの著作『急進主義の伝統』（浜林政夫・鈴木亮訳、新評論、1967年）であった。

R・H・トーニー（1880～1962）は、ウエップ夫妻も教師であったオックスフォード大学ベイリオル・カレッジを1903年に卒業した後、1906年にフェビアン協会に加わり、労働党に入党している。またアルバー・マンズブリッジが1903年に創設した労働者教育協会に1905年から参加し、1928年から45年まで17年間、会長をつとめている。『急進主義の伝統』の第2部「教育」は、労働者教育協会での活動に関わるものである。学者としては、『宗教と資本主義の興隆—歴史的研究—』（岩波文庫）など多数の研究を公刊したイギリス経済史研究の権威であり、「ジェントリ論争」のきっかけとなった「ジェントリの勃興」の著者としても知られる。

なぜ、ここでトーニーを持ち出したかという点、前稿冒頭で言及した長谷川貴彦『現代歴史学への展望 言語論的転回を超えて』（岩波書店、2016年）に、イギリスの労働史研究あるいは社会史研究が、成人教育運動の実践と密接に関わっていると、つぎのような指摘があるからである。「二人〔レイモンド・ウィリアムズとE・P・トムソン〕に共通するのは、イギリスでは戦間期から盛んになる成人教育運動に携わった経験をもつことであり、そのことが労働者民衆の内在的な理解へと道を開いたのであった。」(p.185)。長谷川がイギリスの成人教育運動としてあげているのは、オックスフォード大学のラスキン学寮（ラスキン・カレッジ）を中心としたヒストリー・ワークショップ運動であるが（p.217）、マンズブリッジが創設した労働者教育協会の「チューター・クラス」が、成人教育運動の代表的な存在であった。

トーニーは1953年に、労働者教育協会の50周年記念講演で、「チューター・クラス」での経験について、つぎのように述べている。

大学の若いメンバーの実に多くの人びとが、かれらとは違った人生観をもち、かれらのテーマとは異なったテーマととりくむ成年の男女と親しく交わり、刺激をうけ教訓を学んだということは、歴史や経済学や政治学その他の社会生活にかんする研究の部門にとって有益であったと思う。わたくしは、わたくしが教えていたつもりでじっさいはわたくしの方が教えられていた成人の学生からうけた教訓に、いくら感謝しても足りないくらいだし、われわれの運動に加わった多くのチューターが同じことを言っているのを、わたくしは知っている。（『急進主義の伝統』、p.128）

トーニーを含め、若き研究者は労働者との対話のなかで、「専門意識」に自縄自縛されたテーマ設定・分野設定の保守主義（吉沢南）から解放され、自らのテーマを見出していったのであろう。そして、このような創造的な関係は、国民的歴史学運動で高く評価された、黒羽ら東京教育大歴史学研究会と厚生省女子職員による「母の歴史」の作成においても、見出すことができるものと思われる。社会史研究は、教育運動・学習運動と密接なつながりをもつものであり、そして教育運動・学習運動のなかで、既存の学問の在り方そのものの問い直しが行われたのであろう。

トーニー自身、1949年に行った、「社会史と文学」という講演のなかで、社会史について、つぎのように語っている。

「社会史」—こういう言葉を用いるとすれば—の役割というのは、すでに活動している専門家の隊

列に新たに補充軍を編入することではない。それは主として、もし研究が分業を必要とするなら、その仕事の成果がいかにか一時的なものであろうと、それを総合する必要が人文教育にはあるという真理を強調することにあり、そしてわれわれがこういう結果を個々バラバラの断片としてではなく、有機体のつながった部分としてみることによって、社会生活を構成する諸活動をもっと全体的・現実的にみられるように、われわれを力づけることにある、とわたくしは思う。(p. 263)

社会史は、一つの研究分野としてではなく、分業による研究の細分化に対して、それらを総合する営みとして、位置づけられている。ここに、19世紀的な科学主義的分析主義的人文学とは異なる、新たな人文学の潮流をみてとることができる。

R・H・トーニーを手がかりに、社会史研究と成人教育運動との関連を述べてきたわけであるが、教育運動を成人教育に限定する必要はなかろう。学校教育の現場もまた、既存の学問が問い直される場である。歴史教育に力を尽くし、『日本史教育の理論と方法』(地歴社、初版1972年、増補版1975年)という著書をもつ、黒羽清隆にたちかえって、拙ない文章を閉じたいと思う。

黒羽は、遺稿ともいふべき「歴史教育から歴史学へ、そしてふたたび歴史教育へ」(1986年、『こどもとともに歴史を学び、歴史をつくる 黒羽清隆歴史教育論集』竹林館、2010年、所収)で、つぎのように記している(p. 64～65)。

私は、以下のつたなく、たどたどしい小論において、理性によってひえた聴覚のちからをできるかぎりいかして、「静かな、小さい声」に耳をかたむけつつ、私みずからの歴史教育論を構築してゆきたいとねがっている。

むろん、その「静かな、小さい声」とは、教室の一隅からの子どもたちによる啓示の光と音として、また、学習の対象領域としては、無告の民の営為やうったえやのろいや願望として、私の耳にきこえてくる。

「静かな、小さな声」は、言語化される以前の、まなざしや身振りを含むものであろう。黒羽の社会史は、そうした「静かな、小さな声」に、身体(聴覚)を傾けたことによるものであった。おそらく社会史は、学問それ自体の論理からというよりも、学びの現場における実践と、その反省のなかから立ち上がるものなのであろう。

東海大学文明研究所長
東海大学文学部歴史学科教授
山本和重

20 世紀学問思想論

安田常雄 (神奈川県大学法学部特任教授)

〔公開研究会講演〕
2017年11月25日

1. はじめに

こんにちは。どうも初めまして、ただいまご紹介いただきました安田と申します。今回、山本さんからご依頼がありまして、「20 世紀学問思想論」というテーマでお話しする機会をいただきました。〔紹介要旨は末尾に記載—編集〕でもとにかくテーマが大きいですね。短い時間のなかで、どこまでお話しできるかわかりませんが、これまで「20 世紀」について、自分の経験や問題意識、そして「20 世紀」を捉える方法について考えてきたことをお話しさせていただきたいと思います。

まずタイトルですが、当初山本さんから「20 世紀学問論」という候補をいただいたのですが、「思想」という言葉を捕捉させていただいて「20 世紀学問思想論」とさせていただきます。それはどういう意味かという、「学問」は一面で高度な専門性に基づく抽象的世界なのですが、同時にそれを担った人びとがいて、そうした人びとが自分自身の経験のなかから紡ぎだした「20 世紀像」として結晶しているものなのですね。その意味で「学問」も無前提に存在しているわけではなく、その「学問」を支えるものを射程にいれないとまずいのではないかと考えてきました。だからそういう意味では、学問思想論というのは、学問を支える方法論的、あるいは認識論的な基礎というそういう側面があると同時に、学問をやる一人一人の個人ですよ。やや大きさにいえば、そうした一人一人の人間にとっての生き方というのかな、そういうものというふうな感じにつながっているのか。そのことは同時に、それぞれの人が生きてきた時代との関わり、さらにいえば同時代を生きてきた普通の庶民の経験や生き方とどのように繋がるのかということが大事だと考えてきたんですね。それが「20 世紀学問思想論」ということのイメージということになります。

今回の報告では、こうした視点からこれまで私が折にふれて考えてきた「20 世紀」イメージのいくつかの切り口を通して、方法の問題性を考えてみたいと思います。私の場合、一応「日本近現代史」「日本近現代思想史」あたりがフィールドなので、その窓口からみたかなり限定された「20 世紀」方法

論ということになるかと思います。

それで大急ぎでレジュメと資料のようなものを用意しました。全部で5種類かな。最初に表題が書いてあるのがレジュメですね。それからもう一つは、今村仁司編『現代思想 ピープル 101』（新書館、1999）という本のコピーがあります。この本は、主に社会思想史学会の方々が中心になって編まれた本ですが、その包括性と鋭い批評を通して、「20 世紀」思想史を考えるととてもすぐれた道案内になっていると思うんですね。私も古くからの会員でもあり、一時学会の年報の編集主任をしていたこともあり、そこからたくさんのことを学んできたと思っています。今日配布したプリントは、「20 世紀学問思想論」を考える手がかりとして、T・W・アドルノ、W・ベンヤミン、ハーバーマスについての文章で、著者はいずれも三島憲一さん、この三人は皆さんもよくご存じのようにドイツ・フランクフルト学派の流れに属する思想・哲学者で、「20 世紀学問思想論」にとって重要な人びとです。彼らのやった仕事は、たぶん 20 世紀史を考えるときにも非常に重要なのですが、あとでお話するように、日本にはなかなか紹介されにくかったんですね。もちろん戦前からその紹介に努めていた久野収さんのような人はいたのですが、ひろくその思想的意味が広がりをもったのは、1960 年代になってからだろうと思います。これはやや脇道にそれますが、その契機になったのは広義の「1968 年」との関わりだったと思います。たまたま今年は、現在、国立歴史民俗博物館で「1968 年」という企画展をやっています。ここは実は私の元の勤務先だったので、そんな縁もあって、この企画展のお手伝いをやりました。「1968 年」というと学生運動の時代と受け止められていますが、いわゆる「学生叛乱」と同時に全国規模での地域社会運動がひろがった時代です。そして同時代の潮流として重要なのは、それが、実はかなり根源的な意味での学問批判の問題を含んでいたことだったと思います。そのなかで日本のなかでも、フランクフルト学派の方法意識がある影響を与えることになったんですね。言い換えれば、20 世紀の学問思想の方法が日本でも受け皿をもったのが、この時代であっ

たように見えます。

今日の報告に即していえば、フランクフルト学派を含めた西欧の「20世紀」の提起した方法的な諸相を概観することになるかと思えます。

それから二つ目は、ジョージ・オーウェルというイギリスの作家と「20世紀」というテーマです。オーウェルは、『1984年』という小説で有名ですが、彼は作家でありジャーナリストなので、いわゆる狭い意味での学者ではないんですけども、彼がやった仕事の全体は、実は「20世紀」という問題とおそらく正面から取り組んだこと、そういう人物の一人だと思えますね。

幾らか私は自分の個人的なことという、オーウェルとの付き合いは結構古くて、最初は高校1年生のときに、英語の勉強で読まれたんですね。そのときの作品が、実は『Animal Farm』っていう小説でした。私の通っていた都立高校は、教科書はほんの短い期間で終わっちゃって、あとはサイドリーダーをががんと読まされるというそういうスタイルでした。その最初に読まれたのが、オーウェルの『Animal farm』、それをかなりのスピードで読まれた記憶があります。それで、その時はあまりよく分からなかったのですが、この『Animal Farm』というのは、ロシア革命批判なんですね。この農場とはレーニンからスターリンにかけてのロシア革命の舞台なのです。それから大学に入ってからオーウェルの仕事は割合と好きで、よく読んでいました。

それで、オーウェルに関していうと、私がたまたまその後、「思想の科学研究会」というところでいろいろ仕事をしていたこともありまして、鶴見俊輔さんとの付き合いが結構30年ぐらいありました。鶴見さんはオーウェルがとても好きなので、『思想の科学』を通して私の中に入ってきたオーウェル像というものは、ある意味では「20世紀」を考える貴重な素材になっていると感じています。

それからもう一つの流れが生まれてきました。「20世紀」を考える第四の流れ、一言でいえば「在野学」の流れです。それは皆さんにはあまりなじみがないかもしれませんが、民間学という考え方です。それは一言でいうと、学問は学者だけのものかという問いですね。だから、別の言い方をすると在野学っていう言葉も日本の中にはあるし。これは近世以来、在野学という学問は、かなり大きな流れとしては存在してるわけで。そういう意味で、制度としての学問というよ

りも、さっき申し上げた一人一人の個人が、自分の生き方の中で考えていこうとした学問。だから、これは何とか学とか言わなくてもいいんですけども、そういう世界があり、固有の意味をもつ。つまりその場所は、ある刺激というか触発する問題を提起し続けてきたんじゃないかという問題です。

これについては、後で詳しくお話しますが、日本では1983年に当時早稲田大学におられた鹿野政直さんが、『近代日本の民間学』というタイトルの岩波新書を書きました。それで、その本についての批評を私が書いたのも一つの契機になっていて、鹿野さんとも親しくしていただくようになったのですが、その後鹿野さんと鶴見さん、そして科学史の中山茂さんが編者になって、『民間学事典』という事典を出したんです。1997年ですけども、これは事項編と人物編で構成されていました。

それから5番目の流れは、「20世紀」論を基底におきながら、近現代の日本を捉えなおそうとした二冊の本です。これは日本近現代史研究の大門正克さんと、社会学の天野正子さんと私と3人で編集をした『近現代日本社会の歴史』（吉川弘文館、2003年）で、これは、『近代社会を生きる』と『戦後経験を生きる』の2冊本で、私は後者の巻末に「歴史的思考がはじまる場所」という短い文章を書いているのですが、これは自覚的に「20世紀」論を意識したものでした。そこでの問題意識は、いわゆる「言語論的転回」以後、一体歴史学はどういう方向に向き合っていくべきなのか。当然キーワードは消費社会化と情報社会化っていわれるような、ある種のグローバル化の大きな潮流があるので、そういうものと向き合う方法の在り方をさぐるという意識で書かれ、その問題は現在の問題につながっているのではないかと考えています。

結論を先取りすれば、「20世紀」論の重要な特徴は「断片」の意味という問題なんですね。ある意味では幾つかの断片の意味なんですけれども、その断片をつなげていく。そしてその断片には当然隙間がある。隙間があって、その隙間を既成のものによって「統合」するのではなく、「断片」の固有の多様性を消すことなく、その固有性を生かしながら「全体」をどうデザインするか。実はその問題は「20世紀」という問題なんですよ。「20世紀」とはある意味で、断片と小さなものの意味なんですから。

2. 1920年代の思想とは何か

それですまず最初に、1920年代の思想とは何なんだろうかということになります。さっきご紹介いただきましたように、「民衆思想の展開」という文章で、これは実は社会思想史学会の学会で報告した文章で、「20世紀」、特に日本ですけれども、1920年代の日本というのを考えるときに、世界的な意味での1920年代というのを、どのように理解するかということを書いたものです。それを別の言葉でいえば「19世紀的世界像」という言葉を使ってると思いますが、それが相対化にさらされる時代、言い換えれば、揺れるわけですね。だから、その19世紀的なものの揺れ方っていうのを、どのくらい自覚的に意識化できるかがポイントではないかというのが、その中の大きな論点でありました。

その時私が考えていたのは、1980年代に「1920年代論」の隆盛という状況があったのですが、それをもう一度再考すること。日本では1960～70年代には、1930年代ファシズム論の成果がたくさん刊行されたのですが、それを一度くぐったうえで、あらためて「1920年代」を「現在」との連関性のなかで検証しなおす課題といえるかも知れません。今回はあらためてその点を考えてみたいと思います。

(1) 1920年代の思想とは何か—「実証主義への反逆」

まずはじめにS・ヒューズから再出発することにします。以下それぞれの分野の専門の方もおられると思いますが、日本の歴史と現在を起点にしながら、あらためて素人ですが、重要と思われる点を素描することにします。

S・ヒューズの『意識と社会 ヨーロッパ社会思想 1890—1930』（みすず書房、1970年）という本は、すでによく知られていると思います。この本のなかでの重要なキーワードは「実証主義への反逆」。この動きの起源は、世紀末の1890年代。そこに「19世紀的世界像」の崩壊のはじめを見ていることです。具体的に言えば、この時代、皆さんよくご存じのドストエフスキー、ニーチェ、フロイト、シャルル・ペギー、そしてソレル、パレート、デュルケイム、ベルグソンからジェームズ。そういった人びとが登場し、そこで「実証主義への反逆」というような言葉で総括されるような、ある世界史的な「地殻変動」が展開されていったんじゃないかといわれています。その中の幾つかの項目を拾うと、今までになかった「新し

いもの」ということで幾つか挙げているんですが、その第一は、無意識的なものの役割ですね。これがある意味では初めて、19世紀世紀末に登場してくることになります。これは皆さんもご存じのように、フロイトの「無意識」に象徴されるようなもの、それ以前は、要するに意識的であることは理性的であることと、ある意味では統合でつながれている世界。理性＝意識＝統合という等式の世界像、これが19世紀的発想であるとする、その裏側に隠れて見えないもの、あるいは揺れ動いているようなものへの関心から出発をするということが、第1点です。

それから2番目は、時間意識についての揺らぎ。これが二つ目のポイントだったんじゃないかといわれています。これはご存じのように19世紀的世界というのは、一言で言うと均質な時間なんですよ。時間は均質に刻まれて流れていくという形が、崩れるっていうのかな。揺れるっていうのかな。つまり、時間は途中で途切れたりするし、それから飛躍するんですね。だから、そういう意味での時間意識そのものが、やはり大きく変質していくというのが、どうもこの時代の問題点だったんじゃないか。そういう意味では、均質な時間に対抗するとすれば、それとは違う断絶と飛躍の問題というのが、新たに浮上する重要なポイントとなります。これは、後で出てきますが、W・ベンヤミンなんかの理論の中にも、そういう議論はいっぱいあるので、それがそのスタートですね。ちょうど起源になっていたんじゃないかと思います。

それから3番目は、これは純文学もある意味そうですけども、人間とは何かを考える基礎としての「知識」という問題群。精神科学における「知識」というのは一体何かという議論が、この時期さまざまな形で行われます。そういう中で、19世紀的な社会学（あるいは社会科学）などの既成科学のなかで、「知識」の深層をどのように明らかにすることができるとかという問いが生まれることとなります。これも「無意識」論との連関を含みながら、重要な学問上の方法的問題として浮上してくることになります。これは第3番目の論点ということになります。その最大の問題提起者が、マックス・ウェーバーということになるでしょう。私はもともと経済史の専攻で、社会科学を勉強することから始まっているのですが、学部は大塚久雄さんという先生がいたこともあって、ウェーバーへの関心は一時期の重要な自分のテーマだったように記憶しています。

それでウェーバーの議論は、ご存じのように比較宗教社会学という枠組みで作られた、かなり徹底的な相対性の理論なんですけども、彼の方法上の特徴というのは三つあって、これも皆さんには釈迦に説法だと思いますが、一つは「理念型」というモデルをつくること。それから2番目は、そのモデルをつくることによって既成の価値を離れた、価値からの自由。ヴェルトフライ (Weltfrei) っていう言葉で呼ばれるような「価値からの自由」がその背景にある。それから三つ目は、「因果帰属の論理」という言葉でいわれるのですが、Aという結果を生む可能性が想定される要因が、たとえば三つあるとすれば、その三つの要因との連関を実証的に分析していくわけですが、同時にもしその原因となる要因との連関がない場合に、どのような結果が生まれてくるかを検証すること。それは純粋な方法的実験として遂行されるところに特徴があり、ここにも「実証主義への反逆」がみられることになります。だから、これはいわゆる実証主義の論証の仕方、あるいは実証主義の実証の在り方とは相当違うスタイルを持っていて、ある種の論理的な可能性として想定される幾つかのファクターが、どのような具体的な結果に結び付いていったかということ、思考実験としてやっていくっていうのが、ウェーバーの基本的な考えでした。

だから、そういう意味でウェーバーが考えたスタイルというのは、「知識」というのを考えるときの方法上の特徴というのを、かなり典型的な形で表したものでした。わかりやすく言うと、ウェーバーの議論というのは「理念型」ですから、現実にはどこにもないものなんです。そういうものとして、モデルとしてつくられたもので。それでそのモデルを基準にしながら、彼の比較宗教社会学という学問の全体ができています。それはどう考えても、「19世紀的な世界像」とは違うんですね。そういう意味で、ウェーバーの場合も世紀末からの大きな流れ。いわば、20世紀的なものへ、どう橋渡しをしていくかっていう議論のかなり代表的なモデルになっているのではないかと。そんなふうに思います。

それで4番目は、20世紀論を考えるときにはやっぱり重要なのは、ファシズムとの連関性の問題です。そして「20世紀」論、特に1920年代論を考える場合には、「ファシズム」と「スターリン主義」という問題群が大きな塊としてやってくることになります。つまり、この二つが、自由だといわれた1920年代という同時代の中に、はらまれているわけで、その要素

というのが、当然「20世紀論」を考えるときに内在していることになる。そして内在（潜在）しているものが30年代になって姿を現してくるようになります。

それで次の言葉は、先ほど触れたヒューズの言葉です。そこに「実証主義への反逆」の機能が鮮明に描かれていました。「それらの知的関心は、社会思想の軸を、目に見え客観的に検証できるものから、説明しがたい動機づけの部分的にしか意識されない領域へと移しかえてしまったのだ」。世紀転換期のことですね。「この変化を最も端的な言葉で言ってみれば一人間行動に関するいかなる確実な知識にも到達できないということがどうやら明らかになったのであるから—精神は、実証主義的方法の束縛からまったく解放されてしまったわけである。」これが、彼の言う「実証主義への反逆」という大きな時代潮流の在り方ということになります。

そういう文脈で考えると、先にふれたニーチェの存在というのは、その後、ファシズムに行ったりかいろんなことを散々いわれたりしているんですが、どうもちゃんと考えると、彼のはらんでいたいろんな可能性というのは、そう単純なものではなく、これは、三島憲一さんの言葉を借りれば、十九世紀後半の社会的閉塞状況の中で人間の強烈な自己経験の可能性の探求っていうふうにとめられると思われます。

こうした「ファシズム」との連関でもう一つ簡略にお話ししますと、『西欧の没落』とアドルノとの関わりについてです。ちょうどこの時期1918年、世紀末から20年代にかけてのちょうど間ですけども、有名なシュペングラーの『西欧の没落』という本が刊行されました。これは、世界的大ベストセラーで大きな反響を呼びましたが、S・ヒューズはこの本の特徴について、ドグマティックな調子、決定論的な憶測、自然科学的用語の歴史への荒っぽい適応、人を驚かせる比喩などの歴史としての粗雑さを挙げています。このなかでシュペングラーは「西欧の没落」について4つほどのポイントをあげています。第一は有機体としての文化、第二は8つの文化類型論、第三はその「有機体としての文化」は幼年、青年、壮年、老年期をへて寿命を終わる。その点から個人主義、人道主義、知的自由、懐疑主義っていうのは終末をむかえると宣言しています。そして、個人的自由の制限、信仰の復活。それから暴力使用の増大等がはじまる（「ファシズム」か）。加えて第四にはギリシャ・ローマの冬の時代とある意味で「相同性」の形をもって、ヨーロッパの冬の時代というものが登

場するといえます。これもまた「19世紀的世界像」の崩壊をにらんだ「歴史修正主義」の一種であったといえるかもしれません。

日本においても2000年代に、「歴史修正主義」の潮流が台頭し、現在までそれなりの影響力を拡大しているのは周知のことですが、1920年代に登場したシュペングラー的「歴史修正主義」とよく似た影響をもった動きが、西尾幹二さんの『国民の歴史』というベストセラーだったことも記憶に新しいでしょう。当時、歴研に頼まれて、三島憲一さんと批判集会に参加し、のちに『歴史学研究』に「〈国民史〉の発想と方法」（2000年10月）という文章を書いたことがあります。そのとき私のイメージのなかにあったのは、T・W・アドルノが第二次世界大戦後に書いた『『没落』後のシュペングラー』（『プリズメン』ちくま学芸文庫、1996）という文章でした。『国民の歴史』批判の詳細は、上記の論文を参照していただきたいのですが、アドルノのシュペングラー批判は、シュペングラーのいちばん根幹をついた文章だったという記憶があったんですね。当時、西尾批判はそれこそヤマのようにあったのですが、「歴史修正主義」批判の根幹はどこにあるのかにこだわっていたのかもしれない。アドルノのシュペングラー批判は、西尾批判の泣き所をついたものとも思われた記憶があります。アドルノはまず「自由は、存在するものの抵抗にあってはじめて展開される」と書いています。そして「文化の本質には、死の痕跡がある。このことを否定したのでは、シュペングラーの前に手も足もでない」と続けています。つまり19世紀的文化人意識では駄目だっていうことなんです。それで、アドルノにいわせれば、文化そのものは野蛮を含む。これがわれわれの考えていた基本なので、だからそのことに無自覚に、新たな文化の復活を目指そうという、一種の文化主義っていうのでは駄目なんじゃないかっていうことですね。その後ですが、「シュペングラーの形態学の呪縛圏を逃れるには、野蛮を誹謗し、文化の健全さを信頼するだけでは十分ではない」。だからある意味で、当時の西尾幹二批判も多くはこういう文脈の中で語られてきたというふうに見えました。むしろ文化そのものの中における野蛮の要素というのが洞察されなければならない。彼はこう言っていました。「人類の諸都市をまるで荒野であるかのように一いま実際にその通り荒野だが一監視し、見張っているシュペングラーの獵師のような眼—この眼から隠されているものが、ひとつある」。ここがキーポイント

なんですね。それは何かというと、「退廃のなかで自由になるさまざまな力」という言い方をアドルノはしています。鮮やかな展開だと思うんですね。

その後、アドルノは、ゲオルク・トラクルってドイツの詩人の引用をしています。これも大変印象的な文章でした。それは、「生成するものすべては、いかに病んでいるように見えることか」という詩句です。アドルノは「詩人ゲオルク・トラクルのこの句は、シュペングラーの風景を超絶している」と書き添えています。2000年代における日本の「歴史修正主義」批判に欠けているというのは、ここなんです。それで、アドルノは次のように結語を締めくくっていました。「暴力的で抑圧された生の世界にあっては、この生や、その文化、その粗野さと崇高さの従者であることを辞めると通告するデカダンスこそ、より善い世界の避難所である。シュペングラーの命令どおり、なす術もなく歴史によって押し^{すべ}のけられ、否定されたものたちは、いかに弱々しくあろうと文化の独裁を打破し、先史時代の恐怖にとどめを刺すことを約束するものを、この文化の否定性において否定的に体现している」。この辺りは、否定の弁証法のアドルノの言い方とその論理です。そして次のように書いていました。「それらの人々の異議申し立てのなかに、運命と権力が決定権をもたなくなる日がいつかくる、という唯一の希望がある。西欧の没落に対立するものは、復活した文化ではない。そうではなく、没落してゆく文化像のなかに言葉なく問いかけながら、しまい込まれているユートピアである」。このところにおそらく19世紀末から1920年代にかけて展開していく思想のエッセンスの一つがあり、おそらく日本ではじめてそのことが眼に見えるようになってくるのが、最初のほうでも申し上げたように1960年代後半であったのではないかと。ここにも「20世紀学問思想論」の深層が表現されていると思われるのです。

(2) 1920年代の学問思想—断片

それで次は、幾らか駆け足でお話します。1920年代の学問思想。まさにこれは断片の鮮やかな集積。20年代論については、さまざまな本があります。それぞれの分野の研究者の研究がありますので、簡単にお話しさせていただきます。

一番有名な言葉は、ピーター・ゲイという『ワイマール文化』（みすず書房、新装版1987年）という本を書いた人の表現で言えば、ワイマール文化は「敗戦の中で生まれ、狂乱の

中で生き、悲惨の中で死んだ。これが20年代のワイマール文化ですね。その後、ファシズムとスターリン主義になりますので、その辺の20年代が持っている特徴というのを考えていきたい。20年代の学問思想は、先ほど申し上げた世紀末の「実証主義への反逆」を前提にして展開され、各分野にわたる独自の多元性を特徴としています。その特徴は一種の断片の可能性、断片の潜勢力ということ。

①ベルリン・ダダイズム、それから②のグロスという人は、ワイマール期、ドイツの中で活躍をした画家です。それでグロスは1933年にヒトラーが政権掌握をした後、アメリカに亡命して、アメリカでいわばナチズム批判の絵画をずっと描いてくことになるんですけども、で、この人のやった仕事は、ダダイズムとシュールリアリズムを方法として、腐敗したブルジョワ文化を徹底的に糾弾する姿勢を一貫させていました。ジョージ・グロスについては、2000年に神奈川県立近代美術館などで展覧会が開かれ、そのときに刊行された図録『ジョージ・グロス ベルリン——ニューヨーク』（朝日新聞社発行）がその全体像を描き出しています。

それから③はフランクフルト社会研究所。これはさっき申し上げたフランクフルト学派で、初期にはM・ホルクハイマー、そしてその周辺にいたF・ボルケナウが印象的です。私は個人的には、学生時代からフランクフルト学派は親近感があって、面白くて読んでたこともあって、ここでは三島憲一さんの「アドルノ」（前掲『現代思想 ピープル101』）を見ていただきたいと思います。

まずその特徴の第一は、全体性と断片ということ。「全体性の意味解釈という哲学の欲求そのものが分解していること、したがって哲学は断片の唯物論的解釈を行うのであり、そのために商品交換の分析が必要であること」。「そしていつの日かこの断片が一つの絵柄として纏まって見えてくる希望は捨てられないこと」。この最後の文章は、ご存じの方も多いと思いますが、ベンヤミンの発想です。だから、そういう断片によって一つの星座が作られてくコンステラチオン。星座の一片一片が断片なんだけども、それが形作られてくるある姿、ある図柄の可能性を内包する。だから、断片の持つアクチュアリティ。そういうものが、ある図柄としてまとまってくるというふうに、構成していくという構成の仕方。そのことがベンヤミンの友人でもあったアドルノの中にも、そういう表現で書かれているということです。

それから第二はフランクフルト学派における経験主義の意味ということ。アドルノはご存じのように、ナチズム全盛期にはアメリカに亡命をして、アメリカの大学の中で、ある種の経験主義的な意味での社会心理学の実験と例証に加わります。これは『権威主義的パーソナリティ』という大部の本として、第2次世界大戦中にまとめられます。その本の基本視点は「F・スケール」とよばれる概念です。このFとは何かといえば、ファシズムです。「ファシズム・スケール」。つまり、一人ひとりの人間の行動様式のあり様がいかに「ファシズム」的であるかを測定する経験的基準を考察したものです。それからアメリカ滞在中のアドルノについては、『ミニマ・モラリア』（法政大学出版局、1979年）が思想的傑作といえるでしょう。

そして第三は、ホルクハイマーとの共著、『啓蒙の弁証法』です。それは前述した「神話」と「理性」の弁証法、あるいは「野蛮」と「文明」の弁証法の展開です。「神話はたしかに世界的な啓蒙の過程によって消失していったが、逆に神話にあった野蛮は現在では理性の姿を取って回帰している。現在では学問は一切の自己反省能力を喪失した管理の手段でしかないし、芸術は異なった世界への超越という批判的機能を失ってしまったし、さらに倫理はもはや根拠づけることができなくなっている」と書きました。これはその意味で、「19世紀的世界像」から20世紀への転回をその深部において表現したものだといえるでしょう。

第四には「非同一性」というアドルノの基本概念についてです。これは周知のように全体性批判とかかわる概念であり、特殊性が一般性に包摂されていくことへの疑いとして展開されました。「特殊性を一般性に包含する概念によって非同一性なるものは損壊されざるをえない。いや、そのような損壊を行う自我の成立そのものがすでに壊滅に依拠しているのであり、死の影を宿している。その行き先はアウシュビッツでしかない。しかし、そうしたなかでも真の生活への思いは、ちょっとした名前やイメージのなかに生き続けている」と書いていました。アドルノをはじめとするフランクフルト学派はドイツから亡命し、アメリカでの経験をへて、その後ドイツに戻ってきて、第2次世界大戦中の思想経験というものを世紀転換期の構造、言い換えれば、19世紀的なものへの疑いという文脈の中で再構成しようとして、戦後のドイツでおおきな影響を与えていきました。それが、ドイツの〈1968年〉の非

常に重要な潜勢力になったと思われます。

それでフランクフルト第2世代のハーバーマス。彼もアドルノの流れを受け継ぎながら大きな影響をあたえました。例えば、1962年の『公共性の構造転換』の後、ちょうど1968年に書かれた『認識と関心』は、まさに1968年そのものが「学問へのあり方への厳しい問いかけでもあった」ことを証言しています。日本の中でこれがどう具体的に展開したかという問題は、また別の意味で重要なのですが、世界史的にまさにそういう文脈にある。そのことが実は「20世紀」論というものと密接不可分にあるということだと思います。

それでハーバーマスについて一つだけ追加をすれば、『コミュニケーション的行為の理論』（未来社、1981年）という全3冊の大きな本があります。これは一言で言うとハーバーマスが、1970年代におけるドイツの学生を中心とした異議申し立て運動をどのような形で、受け止めて引き継いでいくかという課題を理論的に展開をした、そういう本だと思うんですね。非常に細かい理論的な分析で、なかなか読むのが大変な本なんですけど、今日は一つだけ取り上げるとすると、この本の中に出てくる、「生活世界の植民地化」という概念です。70年代以降彼が考えていたのは、つまり68年闘争の敗北以後っていうのかな、これからの時代の重要なポイントの一つは、システムそのものが自立をして、それによって人々の生活世界そのものが植民地化されるっていう危機意識ですね。その後、システム化の動向は日本をも含めて多くの国々で、グローバリゼーションとともに展開していくわけですが、そういう中で進行していく「生活世界の植民地化」という問題が、かなり早い時期に問題提起されていることが重要だと思います。20世紀後期の重要問題となっていきます。

それから20世紀思想の方法的問題として重要ないくつかの動きを概観しますと、④としてあげたのは、20年代を象徴するドイツのベルリンのバウハウス。対象は建築なのですが、ここでの方法的キーワードは断片と手作業ということだった。

それから⑤に書いたワールブルグ研究所。これは、ワールブルグという人が中心になって展開した美術（史）の運動で、これも大変有名な運動なんですね。この主題については、田中純さんの『アビ・ヴァールブルク 記憶の迷宮』（青土社、2001年）という本で徹底的に分析されていますが、ここでも方法的核心の一つは、「細部」と「断片」への注目といってよいでしょう。ここで美術史の書き方が変わるんですよ。同

時に深層心理が入ってくる。それはまさに、近代合理主義への反逆という文脈の中で付けられているので、文字通り世紀転換期から20年代というのを、非常に象徴するそういう動きなのかと思います。

それから⑥は、これはいままではかなり知られるようになったロシア・アヴァンギャルド。有名なのはマヤコフスキーという詩人、メイエルホリドという演出家、それから映画でいえばエイゼンシュタインですね。そういうような流れが一斉に出てくる。これはある意味では、ロシア革命をにらみながら、芸術の世界における新しい時代の方法を模索した動きです。例えば、かつて「民衆思想の展開」という文章の中でもちょっと引用しましたが、「肉体それ自体に内在している、息づかいのようなもの」を復元すること。メイエルホリドのこの言葉、これがキーワードなんですね。これが物としてのリズム、素材としての身体のリズム。俳優にとって肉体は自己の素材であるべきですけれども、それを通して自分の表現する世界というのを構成していく。学問論としていえば、学問研究を行い表現する「主体」の身体的・肉体的基礎と学問内容の相関をどのように考えるかという論点となるはずですよ。

それから⑦は、これはイタリアのグラムシの存在というのが1920年代の大きな特徴になるでしょう。周知のように、グラムシのマルクス主義は、土台と上部構造の相互関係への注目、政治的ヘゲモニーの提起と集団論、自然成長と目的意識の問題提起などで知られています（A・グラムシ「従属的諸階級の歴史のために」『知識人と権力』みすず書房、1999年）。いわゆる19世紀的マルクス主義やコミンテルン型公式主義とは違う20世紀マルクス主義という方法の提起といえるでしょう。特に日本でも1990年代以降、グラムシに一つの起源をもつ「サルタン」理論＝方法が紹介され、ポストコロニアル研究が進展したことは記憶に新しいと思います。グラムシのいう「従属的諸階級」、特に「最底辺の社会集団」の人びとの内側にある原初的で、深層に潜む「無意識」を直視する方法は、今後どのように展開していくのか、依然として重要な問題だと思います。グラムシはこうした文脈のなかで、民衆世界の底にある「フォークロア」に注目していますが、単なる「民俗学」に解消されないグラムシの認識の文脈とはなにかが重要だと思います。

一言で言うと19世紀の「実証主義への反逆」というのは、その要素がいろんな分野に飛び散りながら、1920年代にさ

まざまな形をとって展開していきました。そういう遺産をばらばらでどうしようもないというふうに批判する人も、当然いたわけですが、重要なのはその断片のもつポテンシャル（潜勢力）ですね。そのことが20世紀の出発というのを彩っていく。そして、それが先ほど申し上げたように、1930年代にはファシズムとスターリン主義という形で、転回・回収されてしまうわけですが、あらためて戦後になって、さらに現在に連なる「近代後」の時代において、その意味をどのようにとらえなおすか、「20世紀学問思想論」の大切なテーマだと思います。

3. G・オーウェルの20世紀

今日のお話の3つ目のテーマは、「G・オーウェルの20世紀」です。オーウェルはよく知られた小説家ですが、「年譜」をみれば、1903年の生まれで、亡くなったのは1950年。ちょうど20世紀の前半部分を生きた人ですね。そして、彼の中には三つの大きな思想形成の柱があったと私には思われます。もちろん小説家なので小説もありますけれども、彼の中で大きいのはエッセー。あるいは小説自体がエッセーだといってもいいぐらい、そういうふうな作家でもあるんですね（オーウェルについては、さしあたり『ジョージ・オーウェル評論集』全4巻、平凡社ライブラリー、1995年、鶴見俊輔編『G・オーウェル「右であれ左であれ、わが祖国」』平凡社、1971年）。

彼の経歴をずっと見ていきますと、一番最初の段階で大きな影響力を持ったのは、植民地体験です。彼は1922年19歳のときに、アジアに来るんですね。ラングーンに来て、お巡りさんになる。マンダレーのインド帝国警察の訓練所というところに入ります。そこで彼が経験したことは何か、これが第一ですね。オーウェルは、イギリス帝国の人なだけけれども、アジアで経験した植民地主義の痕跡、これが彼の文学思想の第一の大きな特徴だと思います。それで彼の有名な小説では、1930年に『Hanging』（『絞首刑』）という小説。それからもう一つは『Shooting an Elephant』（『象を撃つ』）、この二つの小説が、植民地体験について書かれた小説です。植民地での生活のなかで、彼は深い「失望」を味わうことになる。それで彼は植民地の警察官を辞めてしまって、イギリスへ帰ることになります。彼はその心境を「1927年に休暇で帰国したとき、勤めをやめようというはらはら、もう半ば決まりかけて

いたが、イギリスの空気をひと息吸ったとたん完全に決まった。あのえげつない独裁制の先棒をかつぎに戻るの、もうまっぴらごめんだと思った。しかしわたしの気持ちは、ただそれでいい、というものではなかった。今まで五年間、弾圧機構の一部をつとめてきた私は、そのために良心の呵責を感じていたのだ」ということですね。「帝国主義からぬけ出すだけではじゅうぶんではないので、ありとあらゆる形式の、人間による人間の支配からもぬけ出さねばならないという気がした」と書いてます。

それから2番目は、下層社会体験というのがオーウェル思想のもう一つの柱だと思います。彼はイギリスに帰ってきた後は、パリやロンドンのドヤ街に入って働きながら、その生活を記録するルポルタージュのような仕事をやっていきます。33年に書いた「パリ・ロンドンのどん底生活」という、とても面白い本がありますが、その思想的核心理念はイギリス階級社会に対する批判ということになります。

それから3番目は、スペイン市民戦争経験です。これは36年にスペイン戦争が始まると、彼は運動の中に入っていきます。これはつい最近もカタロニアの独立運動が大きな話題になって注目されていますが、社会の底にあるメンタリティは変わっていない感じがしますね。そういう意味では、オーウェルの書いた『カタロニア讃歌』と地続きなのかもしれません。彼はスペイン戦争で、POUMという運動体に入って、実際にその中で動くことになります。このPOUMっていうのは、直訳するとWorkers' Party of Marxist Unityですから、「マルクス主義統一労働者党」という名前なだけけれども、実態はアナキズムとラディカルな自由主義者が中心になって展開した運動です。当然フランコ独裁体制批判であると同時に、当時は共産党を中心とするスターリン主義に対して、非常に激しい批判をその中に含んでいた。多くの農民層もその重要な主体でした。

それで彼は結局その中で負傷をして、そしてイギリスに戻ってくることになります。1937年に帰国をします。その後ハンフォードの自宅で、よろず屋だとか野菜作りだとか養鶏だとかやぎの飼育をやりながら、市民戦争の体験を書いていきます。これが『カタロニア讃歌』という記録です。

これまでのオーウェルの経験と思想はそれ自体たいへん面白いのですが、実はさらに重要なのは、その後なんですね。1938年から第二次世界大戦の終りぐらいまでの間、オーウェ

ルはいろいろなエッセーをたくさん書いていきます。この時期が重要なのは、実はオーウェルの三つの体験をベースにして、彼の中で「20世紀」という問題が対象化されてくる、あるいは自覚化されてくる時期だからだと思います。オーウェルの仕事のなかで、この時期の仕事が僕は一番やっぱり面白いのですね。

一言で言うと、オーウェルは20世紀の現場を生きた人なんです。その現場の中で、自分にとっての20世紀とは何かということ問い直し続けていた、そういう人です。その作品の中では幾つかをそこに挙げておきましたが、例えば1940年の「鯨の腹の中で」(Inside the Whale)というエッセイ、それから「少年週刊誌」という文章。(Boys' weeklies)。これは、大衆文化論ですね。それから「イギリス、君のイギリス」(England your England)。これは、後で紹介をしますが、『ライオンと一角獣』という長いエッセイの冒頭に置かれている文章ですね。それから「ドナルド・マックギルの芸術」。これも大衆文化論です。だから、漫画家とかそれから子ども向けの少年週刊誌とか、そういうものにかかなり強い関心を持っていて、そういうものの中に表われてくる、19世紀に起源をもつイギリス民衆の内側にある「リベラリズム」、しかも20世紀の過酷な経験をくぐってその意味を再定義する仕事を深めていきます。それから終戦間際になって、『動物農場』というロシア革命批判を書いて、スターリン主義批判を鮮明にし、『1984年』では、もう皆さんよくご存じのように、いわば新たな独裁体制(全体主義)に対する批判を展開していきました。

オーウェルについては、「20世紀論」について多くの視点があるのですが、今日注目したいのは「民衆思想の展開」にも書いたんですが、オーウェルにとっての「地域」とは何かという論点です。オーウェルにとって「地域」というのは、英語で「パトリオティズム」(Patriotism)とは何かという問いなんですね。ここが重要だと私は考えてきました。

オーウェルが「パトリオティズム」と言うとき、「ナショナリズム」とははっきり違うものを指します。ここが定義なんです。「パトリオティズム」は、なかなか微妙なんです。まず訳語についていえば、オーウェルの翻訳の中にも「愛国心」と訳してる本が多いんですけども、「愛国心」というと、日本語の語感としては「ナショナリズム」っぽくなるでしょ。だが、そうではないんだってことをオーウェルは繰り返し言ってる

ので、むしろ日本語にすると一種の「郷土愛」というのが近いと思うんですね。だから、その「パトリオティズム」が、いかに「ナショナリズム」と違うかということの強調の中に、オーウェル思想の一番のエッセンスがある。彼の表現を借りれば、ナショナリズムと愛国心ははっきり違うのだ。「わたしが「愛国心」～この翻訳の愛国心の原語はパトリオティズムです～、パトリオティズムと呼ぶのは、特定の場所と特定の生活様式にたいする献身的な愛情であって、その場所や生活様式こそ世界一だと信じてはいるが、それを他人にまで押しつけようとは考えないものである」という言い方をしていますね。他人にまで押しつけようとするのが「ナショナリズム」なんですね。だから、そこの違いみたいなものにこだわって、この時期のエッセーがずっと書かれます。それでこれは、芸術論、小説論というのもそうだし、さっきも申し上げた大衆文化論。さまざまな大衆文化論が、その場所から書かれていくということになるということですね。

オーウェルの「パトリオティズム」への関心は、すでにスペイン市民戦争の時代から存在していて『カタロニア賛歌』のなかにも表現されていました。例えばスペイン市民戦争に加わって戦った一人一人の兵士に対する、非常に強い思いですね。彼らのなかにあるのは「郷土愛」、地域において生活を基礎にして生まれる感受性です。『カタロニア賛歌』のなかで、オーウェルは次のように書いています。「なぜ市民軍に参加したかと問われれば、私は「ファシズムに対して闘うため」と答えただろうし、何のために闘うのかと問われれば、「共通の品位のために」と答えただろう。ここで言う「品位」っていうのは、decentっていう英語です。この品位という概念は、オーウェルの中にはしばしば意識的に使われていますので、彼の思想の一番根幹にあるのは、このdecentということなんです。それはたぶん彼の「パトリオティズム」と密接に関わっている感受性だと思うんですね。

こうしたオーウェルの「パトリオティズム」について、最も詳しく書いているのは「イギリス、君のイギリス」というエッセイでしょう。その一部を紹介することにします。

「国民というものがはたしてあるのだろうか？ われわれは四千五百万の、それぞれに異なった個人ではないのか？」ここがベースですね。一人一人の個人を基礎にして考えること、それから「イギリス的特性」といわれるものについて、非常に具体的に書いています。イギリス人というのは、草花に対す

る愛好心というのがあると書き始めていて、ある概念が、一つのポイントになります。それは「イギリス人の生活の私的性格」という言葉です。これは英語では *privateness* という言葉を使っています。 *privateness* は、あんまり辞書をみても出てこないんですけども、オーウェル独特の使い方なのかもしれないと思いますね。「イギリス人の生活の私的性格」というのは、「*Privateness of English life*」と書いてあります。「われわれは草花を愛する国民であるが、同時にまた、切手収集家、鳩の飼育家、素人大工、債券の貯蓄者、投箭競技者、クロスワードパズル・ファンの国民でもある」と、イギリスの地域民衆の暮らしかたを描いていきます。そして「真に土着の文化はすべて、たとえ公共的であっても官制的でないもの—パブ、フットボールの試合、裏庭の野菜畑、炉辺、「一杯のお茶」—というのを中心に形作られている」と書かれます。ここで「公共的」というのは、これは英語で言うと、 *communal* です。 *communal* であっても、「官制的」という日本語の原語は、 *official* です。 「公共的」であっても「官制的」ではないもの。そういうものとして、彼は *privateness* の内容を考えようとしている。だからつまり、地域における生活に根ざした、小さな共同性という意味ですね。それがだから職務ともいうようなものに、吸収されていくようなものではない。そういう「個人の自由」というようなものを基礎に考えようというのが、彼の「パトリオティズム」の根幹にあるわけです。しかも、一人一人の個人の生活の中での楽しみ、そういうものにやっぱり根を置いたところで、20世紀という時代における思想の動向というのを確定しようとしていった、そういう人であるというふうに見えます。

こうしたオーウェルの「パトリオティズム」の意味が、日本においてある実感をもって受け止められるようになったのは、高度成長をくぐった「公害」「環境」問題を契機にしており、ここでも世界の「20世紀論」は、1960年代以降、現在まで続く思想的争点を形作っていると思われる。

4. 1920年代を起点に、20世紀の学問思想を、いかに捉えるか—日本の場合

最後は、そんなようなことを、断片を拾いながら日本における20年代というのをどう考えるか。日本においても20年代というのは、当然その後戦争の時代になりますので、戦争との関わりっていうのを考えることでもあり、その後戦後と

いう時代を考えるベースにも多分なってくるだろうというのが、「民衆思想の展開」の一つの柱ともなっています。

問題は、世界の動向との同時代性という問いになります。その場合ずれがあるんですね。今まで申し上げてきた、世紀末から1920年代に登場した新しい思想のスタイル、あるいは学問のスタイル、そして方法というものが、直ちに戦後日本の中に入ってくるわけではないですね。それが日本に入ってくるのは、やっと1960年代になってからです。そういう意味の時間的ずれを含みながら、にもかかわらず問題そのものは残っているので、その問題を引き受けながらどのようなものとして展開していくかという、そういうことになるだろうと思いますね。

そのような状況のなかで、私はその中で何を考えようとしてきたかという。一つは、最初のほうでお話をした在野の学問、あるいは民間の学問というものの意味です。つまり、職業としての学者っていうのは一方でいるんですけども、同時に普通に生きている普通の人たちが、自分の暮らしの中でものを考え、ある筋道だった生き方の形のようなものを展開していく動きというのが、実は長い伝統として日本の中にあるんですよ。その大きな柱は、やっぱり近世だと思えます。

それで、それが明治以降の近代の中で、一回その近世の流れが断ち切られます。そして、近代の学問というのは、まさに国家主導による、国家の手によるアカデミズムの形成という形でスタートをします。鹿野さんの民間学の定義によれば、民俗学の人とか、いろんな形で官学アカデミズムに抵抗する視点っていうのかな、そういうふうなものが生まれてくるんですけども、それはほそぼそとそれがつながってくる。

それから 鹿野さんの本は大変いい本なんですけれども、実は敗戦まででストップしているんで、戦後の中にも実は今申し上げた、この民間学といわれる考え方、あるいは運動です。文化運動という形をとったり、市民運動とか住民運動とかもそういう流れにあります。そうした戦後の中にもずっと続いているさまざまな形の民間学の流れというのがあるわけです。例えば1950年代に日本の中で展開する、生活記録運動というお母さんと女性たちとかいろんな人たち、あるいは紡績女工の人たちといったような人たちが、回覧ノートを作って自分の考えをずっと書いていって、それをずっと記録していきますね。だから、その生活記録の運動みたいなもの

のっていうのは、かなり大きな流れとしてあったんですけれども、そういうのが、先ほどの世界的な同時性という観点からいえば、世界の中でどのぐらいあったのだろうか。その辺の実態については現在のところ、気になっているのですが、よくわかりません。ただ日本の戦後の事例の独自性は貴重なものだったのではないかと思います。

それで私個人としては、さっき申し上げた20年代の大きな潮流をベースにおいて、一つはモダニズムという軸の断絶を含んだ連続性に関心をもっています。このモダンというのは、日本の場合は「近代」と「現代」が両方入りますので。そういう意味でモダニズムというの、同じ言葉を使いながら同時に「近代」的なもの、だから場合によっては19世紀も入るんですよ。そういうものとそれから、それをいわば批判的に超えようとする、世紀末以降の「現代」の問題も含めた形のモダニズムの流れが重層的に展開してきわけで、おもしろい問題があると思っています。

それからマルクス主義はどうなっていくか。これについては、すでに「マルクス主義と知識人」(『岩波講座 日本通史』近代3, 1994年)に書きました。そこでのポイントの一つは、スターリン主義の問題、同時にスターリン批判の問題が、日本の中でどう受け継がれていったか。その核心は、日本の知識人の思考様式の問題として存在すると考えています。

それから農本主義というのは簡単に言うと、本来は日本における土着的な生活思想の一つなのですが、それが1930年代には「ファシズム」的な役割を果していく。その問題。それから、それが戦後になってはどういうふうに展開していくかっていうその3本柱を柱にして、戦中とそれから戦後になってから、それがどう展開していくかっていうのを、ある程度追っかけようというような仕事と、まだまだ不十分でありますけれどもやってきたっていう感じですね。

5. 新しい歴史学・歴史叙述について—1999年、歴研大会について

それでもう時間になりましたので、そろそろ終わりにしたいと思いますが。最後は、さきほどお話のあった1999年の歴研大会ですね。『戦後歴史学再考』(青木書店, 2000年)という本に記録が載っています。その中では、当時のいわゆる新しい歴史学の潮流。この新しいというのは、つまり20世紀的な問題意識に基づいた歴史認識の方法論のようなものが、

日本に入ってくるんですね。それが、1980年代後半ぐらいから90年代にかけて入ってきます。大きな柱は、世界システム論というウォーラスティンの考え方。それから国民国家論っていう名前では呼ばれている、ある種のナショナリズム批判。それからもう一つは、これは70年代、それ以前から前史はあるんですけども、社会史という名前では呼ばれている大きな潮流ですね。その社会史の中にも、その発想の根っこには、さっき申し上げた世紀末から20年代にかけて展開したさまざまなファクターが、その中に流れ込んでいるわけで。さっき申し上げた60年代辺りを境にして日本に、20世紀的なものが入ってくる。そんなふうに見えます。それは逆の言い方をすると、従来からあった歴史認識の在り方みたいなものに対する、かなり痛烈な批判を含んで展開していますので、このところで当然反発もあり、議論もあり、せめぎあっている状況が生まれてきた。そんな状況が多分この99年の大会にも流れ込んでいったと思われま。そうした方法的状況について中間総括をやったらどうかというのが、私の最初の問題意識でした。

社会史については、二宮宏之さんの問題提起が注目されていきました。彼の言い方を借りれば、あくまでも認識のベースは自分だ。そして、自分と今というのがその出発なんだと繰り返し二宮さんは言っていましたね。それから、その自分というのを捉えるときに、「根拠地型の自己」という言い方をしていますが、要するに、固い自己ですね。19世紀的な理性に基づく自己ではなく、いわば、揺らぎとか振り幅というものを含んだ自己、そういうのを含んだ多元的な自己というのが、その根底におかれている。そういう枠組みの中で、社会の歴史を考えよう。その場合社会というのは硬い実体というより、多様な相互関係の総体のことです。そういう相互浸透関係としての社会というのを、もう一回どういうふうな形で捉え直していけるか。つまり、つながりということですね。だから、人間のつながり方の多元的な在り方というものを基礎に考えたというのが問題意識だったと思います。

それで問題は、その後、世界システム論や国民国家論、そして社会史はどこへ行ったのか。それはいわゆる言語論的展開以後というのをどういうふうに見るのかと関わりますが、今どういう場所にわれわれは立って、ものを考えようとしてるのかという問題だろうと思いますね。それに対する処方箋は、あんまり斬新なアイデアはないんですけども、最後の引用

のところを最後のほうで書いたのは、さまざまな形のヨーロッパの新しい理論、ポスト構造主義、ポストコロニアル論、ジェンダー論など、いろいろありますが、それぞれの特性や有効性を尊重しながら、最後は〈現場性〉という場所にいくのではないかというのが、私が考えていたところです。

具体的には、この時期 90 年代後半から牧原憲夫さんの『国民と客分のあいだ』（山川出版社、1998 年）や、杉原達さんの『越境する民』（新幹社、1998 年）といったすぐれた本があり、それはいずれも暮らしの現場っていうところに足場を置き、その歴史的な現場という場所と、それから表象との関係が、せめぎ合っている構造そのものが、そこでは問題になっていたのですね。おそらくここでいう〈現場性〉というのは、生活史を背負った表象がせめぎ合う力の場のことであり、「複数の主体が共時的な相互接触へとさらされる場所」（鷺田清一『「聴く」ことの力』TBS プリタニカ、1999 年）のことで、これが実は社会ということなんですね。そういうふうな社会としての〈現場性〉。そういう小さな現場の持っているリアリティー。さっきの 20 世紀論で言えば、一種の断片ですけども、そういう断片としての〈現場性〉。そこに足場を置きながら再考していければという、そんなことを考えてきました。

残された方法的問題、その思想的基礎などはたくさんあると思いますが、私の方からのお話は以上とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

〔参考文献〕

- S・ヒューズ『意識と社会—ヨーロッパ社会思想 1890-1930』みすず書房、1970
- T・W・アドルノ『ミニマ・モラリア』法政大学出版局、1979
- 鹿野政直、鶴見俊輔、中山茂編『民間学事典』事項編、人物編、三省堂、1997
- 市村弘正『敗北の二十世紀』世織書房、1998
- 今村仁司編『現代思想 ピーブル 101』新書館、1999
- 蔭山宏『崩壊の経験—現代ドイツ政治思想講義』慶應義塾大学出版会、2013
- 三島憲一『歴史意識の断層—理性批判と批判的理性のあいだ』岩波書店、2014
- 安田常雄「民衆思想の展開」、安田常雄『暮らしの社会思想』勁草書房、1987
- 安田常雄「民間学の意味するもの」、安田前掲書
- 安田常雄「方法についての断章一序にかえて」、歴史学研究会編『戦後歴史学再考』青木書店、2000
- 安田常雄、佐藤能丸編『思想史の発想と方法』東京堂出版、2000
- 安田常雄「〈国民史〉の発想と方法」『歴史学研究』No.741、2000 年 10 月

安田常雄、長尾伸一、木前利秋「〈座談会〉戦後日本における「啓蒙」研究の発想と論理」『社会思想史研究』No.30、2006

大門正克、安田常雄、天野正子編『近現代日本社会の歴史 戦後経験を生きる』吉川弘文館、2003。特に安田「歴史的思考のはじまる場所」

〔講師紹介要旨〕

専門は民衆思想史、民衆運動史。著書として『日本ファシズムと民衆運動』（れんが書房新社、1979）、『出会いの思想史—渋谷定輔論』（勁草書房、1982）、また近年では、編著『シリーズ戦後日本社会の歴史』全 4 巻（岩波書店、2012-13）などがある。1999 年度の歴史学研究会大会全体会「再考：方法としての戦後歴史学」を企画。2002 年に「専門性を尊重しつつも市民に向けて開かれ」た学問を掲げて発足した「同時代史学会」の代表に就任するとともに、国立歴史民俗博物館教授・副館長として、2010 年 3 月オープンと同館総合展示室第 6 室〈現代〉の展示を担当。また同館が 2017 年に開催した企画展示「『1968 年』無数の問いの噴出の時代—」のプロジェクト委員をつとめた。2012 年 4 月から神奈川大学特任教授。（文責：山本和重）

カリキュラム研究史に見る「近代性」に関する一考察

— 20世紀前半の米国社会科教育史に焦点を当てて —

斉藤仁一朗 東海大学課程資格教育センター助教

〔論文〕

Reinterpretation on the Concept of “Modern” in the History of Curriculum Studies: Focusing on Trend in the American Social Studies Curriculum in the Early 20th Century

Jinichiro SAITO

Professional Liscencing Training Center

This paper describes trend in curriculum theory and Educational discourse in the field of American Social Studies in the early 20th century. Through analysis of Curriculum theories, such as the Report of the Social Studies Committee of the National Education Association (NEA) (1916) and works by curriculum theorist Harold Rugg. This paper explores the relationship between curriculum theory in modern era and the curriculum theory in postmodern era.

Many previous researchers have discussed two paradigms of curriculum studies: one based on the exegetics and other based on behavioral science. The relationship between these theories has been linked to the relationship between the modern and postmodern eras. However, there is little existing research addressing the tuning point at which modern curriculum theory was created or shifted to postmodern. This paper describes the historical background and causes that led to changed understanding of the social studies curriculum in early 20th century America. This paper is part of a case study describing trends in curriculum theories in the 20th century.

Accepted, Jan. 6, 2018

I. 問題の所在と本稿の目的

本稿では、「カリキュラムの一般原理を合理的な手続きに基づいて開発する」という工学なカリキュラム研究の着想が生まれた経緯について、米国社会科教育史の文脈に基づきながら考察を行う。これによって、カリキュラム研究における「近代性」とは何を指すのかの事例的考察をすることが本稿の目的となる。

では、カリキュラム研究において、「近代性」とはどのように捉えられてきたのだろうか。長尾は、「近代のカリキュラム研究を導いてきたのは、『進歩』『発達』『啓蒙』『科学』『理性』といった『大きな物語』であったし、カリキュラムの構成法を中心としたその研究方法は工学と建築のメタファとも言うべきものであった」ことに言及している¹⁾。佐藤学は、行動科学に基づくパラダイムから解釈的アプローチへのパラダイム転換が、1970年代における行動主義パラダイムへの批判によって生まれたとする²⁾。また、カリキュラム史家のパイナは、後述するように、通称「タイラー原理」に象徴されるカリキュ

ラム開発と、それに代わる新しいカリキュラム研究とを区別し、「カリキュラム開発は1969年に死んだ」と述べている³⁾。これらのパラダイムの違いは、前者が「工学的アプローチ」で後者が「羅生門的アプローチ」というようなカリキュラム概念の捉え方をめぐる異なる考え方としても説明できる⁴⁾。この構図は、「モダン VS ポストモダン」の二項対立としても捉えることもできる⁵⁾。

これらの新しいパラダイムやそれに関連する研究は、1980年代以降の日本のカリキュラム研究に大きな影響を与えてきた。この中で、新旧の2つのパラダイムの関係を「転換」と捉える主張と、「複数化」と捉える主張とがある。例えば、佐藤は、「カリキュラム研究は、1970年代から1980年代にかけてパラダイムを大きく転換させている。」と述べる⁶⁾。佐藤によれば、これらのパラダイム転換は、行動科学を基礎とする数量的研究から文化人類学や認知心理学や芸術批評など、新しい人文社会科学を基礎とする質的研究への転換を遂げ、そのことが、カリキュラム研究の主体を、カリキュラムそのものよりも、教師へと焦点を移行させたこととされる⁷⁾。一方で、安彦は「アメリカには依然としてカリキュラム構成・開発の流れも明確にあり、一面的に見ることは避けるべきである」という指摘をしている⁸⁾。その後、松下は、「現にタイラー原理を

本論文は、『文明』投稿規定に基づき、レフェリーの査読を受けたものである。原稿受理日：2018年1月6日

源流とするカリキュラム開発論は、新たなパラダイムに取って代わられるどころか、この数十年の間に、教育のグローバル化やスタンダード化の潮流のなかで、学校段階や国・文化の差異を超えてますます広く浸透しているようにも見える」と述べ、「新たなパラダイムがもたらしたのは、パラダイムの『転換』というよりもむしろ『複数化』とみなす方が正確だろう。」と評価している⁹⁾。

これは言い換えれば、工学的なカリキュラム研究観と解釈的なカリキュラム研究観とが、対立しているのか、そうでないのかを論じた議論と捉えることもできるだろう。同時に、カリキュラム研究における「近代的なもの」が何を意味するのかを問う議論と捉えることもできる。

このような議論を念頭に置きつつ、本稿では、「近代的」とされるカリキュラム開発方法が生まれる時期に注目して検討を行う。その際に注目するのが、20世紀前半の米国社会科カリキュラム史であり、1916年の『NEA 社会科委員会報告書』とカリキュラム研究者「ハロルド・ラッグ」である。それらの比較を通して、工学的なアプローチが誕生する背景と意図を明らかにしたい。

そこで本稿では、主に三段階の研究手順をとる。第一に、カリキュラム研究における「近代的」とは何を意味するのか、もしくは「近代的」「現代的」といわれる特徴はどのように区別されてきたのかについて、先行研究の議論を踏まえた整理を行う。この際に、本稿の考察で依拠する「近代」に関する歴史認識の立場も示す。第二に、20世紀前半の社会科カリキュラム史に注目し、NEA 社会科委員会とハロルド・ラッグが、カリキュラムをどのように捉えていたのかを明らかにする。第三に、先の社会科委員会とハロルド・ラッグに対する評価を踏まえ、それらの考察結果が、カリキュラム研究における二つのパラダイムに示唆することを明らかにし、「近代性」とは何を意味するのかについての本事例における見解を示す。

II. カリキュラム研究に見る「近代」

1. 近代としてのカリキュラム研究

先に述べた通り、カリキュラム研究における新旧のパラダイムの違いは、様々な研究者によって言及がなされてきた。カリキュラム研究における「近代的」な研究と「現代的」な研究とを意識して論じた研究として、安彦の研究が挙げられる¹⁰⁾。安彦によれば、カリキュラムを構成する際に、教育目

的を実証的に明確化するという手続きは、20世紀初期の米国のカリキュラム研究において、初めて出現したとされる。それ以前のカリキュラム構成法は、「教科書法」と呼ばれる、教科書の編成内容に従って教えればよいという考えが主流であった。それに対して、20世紀初頭の米国では、哲学的な考察や、社会調査などによって、カリキュラムの目的を設定するものとなった。とりわけ、実証科学的分析を行い、カリキュラム構成をする手法が開発された点が注目される。その系譜は、ポピットの「活動分析法」に始まり、「社会機能法」、「問題領域法」など、様々なカリキュラム構成論が提案されている。安彦は、近代のカリキュラムは、「子ども」「社会的要請」「実証科学的方法」「科学の絶対性」などを、重視すべき自明のことと考えてきたとする¹¹⁾。そして、これらの特徴を説明したものとして、ラルフ・タイラーの「タイラー原理」と呼ばれるカリキュラム開発の段階性が示された¹²⁾。

1. 学校はいかなる教育目標を達成しようとするべきか。
2. これらの目的を達成しようとするために、いかなる教育的経験を用意できるか。
3. これらの教育的経験はいかにして効果的に組織されるか
4. 我々はこれらの目的が達成されたかどうかをいかにして決定できるか。

このタイラー原理について、安彦は、「基本的に、この段階的手段を行動主義的に、明確な科学的手続きとして確立することを主眼としている点で、『近代合理性』によって定式化されたものと見られている」と述べた¹³⁾。また、佐藤学は、タイラー原理の中に「技術主義的合理性」や、「社会工学の性格」が含まれていると捉えている¹⁴⁾。

2. 「近代的」なカリキュラム研究と対比される研究

一方で、安彦によれば、『『近代』が自明視してきた『合理性』『実証科学性』『分析的方法』の妥当性や信頼性に疑問を投げかけたのが『現代』である』とされる。安彦は、これらの「現代」の研究を大きく三つに大別している¹⁵⁾。

第一は、カリキュラム社会学による外からの教育効果の社会学的分析である。例えば、公式的なカリキュラムとは異なる政治的、社会的効果が生まれ、結果的に階層の再生産や社会体制への同化が生じるなどの「隠れたカリキュラム」を分析する研究がこれに含まれる。

第二は、カリキュラムの生み出す社会的差別を、思想的・実践的立場から批判する分析である。例えば、カリキュラムを、人種差別、民族差別、性差別その他を、イデオロギー的に隠しながら人々を受け入れさせる装置だと捉え、そこに潜む政治性、権力性を批判的に分析する研究がこれに含まれる。

第三は、カリキュラム概念そのものを一度こわし、あらためてその含意からとらえ直そうとする再概念化の試みを通じた分析である。例えば、カリキュラム概念を、「個人の履歴」という原意に戻し、その観点から教育を捉え直し、カリキュラムを社会生活全体を含むものへと脱学校化する研究などがこれに含まれる。

その他にも、佐藤は、パラダイムの移行に際して、カリキュラム研究がカリキュラムの内容構成の議論から実践者としての教師研究へと焦点が移ったことを述べている¹⁶⁾。さらには、実践されたカリキュラムを、アクション・リサーチや参与観察などに基づく質的方法によって描き出そうとする研究も多くなされるようになってきている¹⁷⁾。

そして、繰り返しになるが、こういった新しい研究が生まれる一方で、依然としてカリキュラムの開発を行う活動は様々な提案され続けており、新旧のパラダイムを混合したような研究も生まれるなど、研究の形態やアプローチは多様化し続けている¹⁸⁾。そのため、現在のカリキュラム研究においては、二つのパラダイムが「複数化」と共に、「接近」「融合」などをする状況となっている。以上のように、二つのパラダイムの存在については、1980年代以降にわが国でも多くの研究が重ねられてきた。

3. 「後期近代」と近代的なものに対抗する動き

これらを踏まえた上で、本稿では、パラダイムの複数化・接近・融合の問題が、カリキュラム研究における「近代性」などのように関わったのかを検討したい。

先行研究は、「近代」と「現代」の対比の中で、カリキュラム研究史を整理するものであった。ただ、いずれの研究においても、例えば、19世紀末～20世紀前半に活躍したデューイのカリキュラム研究の存在について「近代」「現代」の枠組みでうまく説明できていない。実際、安彦が言うように、「合理性」「実証科学性」を追究していた20世紀前半の米国においても、哲学的考察に基づくカリキュラム開発は存在したし、

個々の子どもの多様な興味関心を重視した取り組みもなされていた¹⁹⁾。

このようなカリキュラム史を捉える際に、本稿では、アンソニー・ギデンズらが述べる「再帰的近代化論」に基づき、現代を「後期近代」として捉えることとした²⁰⁾。ギデンズは、近代を「時間と空間の分離」「脱埋め込み」「再帰的秩序化と再秩序化」の三条件で捉えている。また、「脱埋め込み化」に関しては、専門家システムへの信頼を強調している。ギデンズによれば、「ポスト・モダン」ではなく、近代的な特徴を一層徹底し、普遍化していく時代として「後期近代」として論じるに至る²¹⁾。この論の特徴は、近代と近代以後を切り離すことなく、連続的に捉える点にある。

そして、ポストモダンを「モダンの後に来る時代を指すのではなく、モダンの中であってモダンと対抗するような運動」として指す場合もあり²²⁾、近代の中に解釈的なカリキュラム観を位置づけることも可能であると考えられる。実際、デューイが『学校と社会』で問題視したのも、近代化する産業社会に対してであった²³⁾。この際の問題意識を「ポスト産業社会の萌芽」に対するものだったと捉えることもできる²⁴⁾。そのため、1970年代以前のカリキュラム研究史の中に、合理性追求型のカリキュラム観と、解釈的なカリキュラム観とが共存する状況を再発見することができるのではないだろうか。

以上の問題意識から、Ⅲ章では、20世紀前半の米国社会科カリキュラム史の事例分析を行うこととする。

Ⅲ. 20世紀前半期の米国社会科カリキュラム史の位相

1. NEA『社会科委員会報告書』の場合

(1) 教科の目標とカリキュラムの方針

米国では、19世紀末から20世紀初頭にかけて、社会系教科のカリキュラム改革が進んだ。その中で、大まかに言えば、通史教育を基調とした社会系教科が、社会参加学習を軸に据えた社会科教育へと転換を遂げていくことになる。その象徴となったのが、1916年のNEA社会科委員会報告書であった。

このNEA社会科委員会の活動は、1913年から1916年にわたっており、3つの報告書にまとめられている。第1に、1913年に一連の改革の予備報告書である『中等教育の改造²⁵⁾』。第2に、「コミュニティ・シヴィックス」の目的、内容、方法について論じた『コミュニティ・シヴィックスの教授²⁶⁾』。

第3に、社会科委員会の最終的な方針をまとめたのが、1916年の『中等教育における社会科²⁷⁾』である。この報告書では中等教育社会科に関する科目編成が示されて、具体例も複数例示されている。本稿で注目するのも、この最終報告書である。

社会科委員会は、社会科を「人間社会の組織とその発達、および社会諸集団の構成員としての人間に直接関係する教科である」と提示した²⁸⁾。この際、社会科委員会は、社会科に関する詳細なカリキュラムを提示することを目指していなかった。ここでは、各学校や教師を取り巻く社会の状況に適したものとなるよう、詳細な案を提示せず、できるだけ教師や学校管理者に自主裁量を促すものとなっている²⁹⁾。この点が、社会科教育委員会の特徴であると同時に、のちに批判をされる点でもあった。

(2) 教師に任された柔軟な自主裁量とデューイ思想との繋がり

では、社会科委員会は、教師の自主裁量をどのように重視しようとしたのか。それに関して、複数の社会的状況や事例を提示し、それぞれの場面での選択肢を示す内容となっている。例えば、社会科委員会は、10～12学年のカリキュラムの構造原理が、「非常に柔軟であり、異なる集団に属する生徒の特別な必要性や、商業系、科学系、技術系、農業系といった異なるハイスクールカリキュラムの必要性に対して容易に適合する。」と述べた。この説明から、社会科委員会報告書の10～12学年のカリキュラムが、異なる校種や職業系コースの必要性に対応するという、これらの学年固有の問題に対応しようとしていたことが分かる。そのため、10～12学年のカリキュラムの方針は、それ以前の学年と比べ、生徒が属する社会集団や進路の違いをより顕著に意識したものとなっている。また、実際に提案される授業例でも、多様な文脈に即した授業が提示されている。例えば、職業学校において、労働者階級の生徒が多い学級において、産業や職業などの特定の内容を多く扱った事例が示されている。その他、ハザードの理論に影響を与えたとされるロビンソンも同様の指摘をしている。彼は、工業学校の生徒に対して、産業史学習の意義を説いている。また、黒人に対し、生活改善を促していたジョーンズのハンプトン社会科についても、引用がなされている。これらのことから分かるのは、提示されている授業例

が特定の文脈の中で描かれていることである。また、第9学年のコミュニティ・シヴィックスの学習を示す際にも、あらかじめ設定した11個の題目を提示し、それぞれの題目の学習事例を提示しているが、これらも必ず学ぶべき項目として提示している訳ではなく、生徒の直接的興味や必要性に応じて、アプローチを変えてよいことになっていた³⁰⁾。

また、赤沢によれば、本報告書における興味論は、社会科の授業において、教師が生活準備的な発想に立って事前に準備しておいた「発問」ではなく、生徒が現在知りたいと思つて発した「質問」によって構成すべきと捉えていると評価される³¹⁾。この点で、社会的な要請や、教育学的な必要性から見て、事前に学習内容を設定するのではなく、その場の生徒の状況に応じた授業を志向するものであったといえる。

では、これらのアプローチはどのような理論的根拠に基づいて論じられたのだろうか。それに関して、社会科教育史家のフェラッチェは「社会科委員会報告書は、全ての教育内容が『現在の成長のための必要性』に注目すべきであるというデューイの理念を基礎にして作られていた³²⁾。」と述べるように、1916年のNEA社会科委員会報告書が、デューイ思想と密接な関わりがあった。

では、どのようにデューイのテキストが引用されたのだろうか。例えば、社会科委員会報告書の中で、以下のようにデューイを引用した上で主張がなされている。

もし子どもと教師が現在の成長のために必要性を得るために一生懸命になり、将来に必要な学習をできる限り保障することができるならば、教育の理念の転換はすぐに起こり、ほかの望ましい諸変化も大規模に起こると私たちは真に信じることができる。(上記はデューイの引用：筆者註)

それゆえ、ハイスクールの教育課程は、将来の必要性にあまりにも大きく決定されており、現在の必要性や過去の経験をあまりにも軽視してきた。重要な事実、生徒が生計を立てる準備をしているのではなく、生徒自身が現在の社会的環境・状況に適応することができる精神的・社会的教養や訓練などの直接的興味において、生徒は現に生活しているということである。まさしく現在の成長過程によって、生徒は将来のための最善の準備をすることができる³³⁾。

近年の研究では、社会科委員会がデューイのテキストを何度も引用した理由について、デューイの主張が多義的に解釈できるため、異なる教育的立場の人々の主張を両立するものであったと捉えられている。実際、「現在の成長のため必要性」を強調することで、産業主義に依拠して実用的価値の知識や技能を選択したり能率的な組織をしようとする、単に狭い意味での社会効率主義的な発想を避けることができる。また、それだけでなく、大学準備教育として歴史教育を学ぶ人をも容認できる可能性を含むものだったとフェラッチェは捉えている³⁴⁾。つまり、デューイの「現在の成長のための必要性」の理論は、生徒が住む生活環境や文化的背景などによって、教育の実態が変わることを容認するものとされる。

このように、読み手側の解釈が開かれていると同時に、教師の自主裁量も求められることになる。こういったアプローチを用いる以上、状況に応じて多様な教育方法や教育的必要性に応じる柔軟性が必要になる。そのための鍵となる考え方として、デューイ思想で補っていたと言える³⁵⁾。

以上のように、社会科委員会は、多義的に解釈できるような定義や表現を用いることで、社会科教育のあり方を開かれたものとしている。カリキュラムの原則も一般原則を中心に示し、包摂枠としてデューイ思想が存在していた。

この見方は、特定の教育内容の系統性を前提視せずに、教師の裁量によってカリキュラムを動的に捉えて良いことを示すものであった。それは同時に、カリキュラムの合理性や科学性よりも、学校や学級の置かれた文脈を重視し、その実践者の解釈を重視した発想であったと言える。

(3) 文脈重視のカリキュラムに生じる現実的諸問題

1) 教材開発の準備不足

NEA 社会科委員会は、カリキュラム原理を明示しえなかったことが批判されることもあるが、委員会は、教師の自主裁量に全てを任せていたわけではない。むしろ、教科書や教員養成の再検討の必要性を提起していた。例えば、報告書の最終章において、社会科委員会は、教員養成や教科書の不十分さについて以下のように指摘をしている。

必然的に1つの疑問が湧くだろう。本報告書で提案した内容と原理に基づいて作られた教科書はどこに存在するのか。そして、そのような教科書が手に入らなければ、経験がない教師や、伝

統的な教育方法に基づいて訓練された教師は、どのようにして新しい方法を身に付けて、成功するチャンスを期待できるのだろうか、と³⁶⁾。

社会科委員会は、現状では報告書の提案に沿った教科書が少ないことを認めつつも、教員養成の不十分さに論点を移した。それに関して委員会は、「新しい手法によって訓練された、新たな視点を持つ教師が不足しているという事態は、適切な教科書が存在しないことよりも深刻な問題である。なぜならば、熟練した教師は、仮に教科書の不十分なものであっても指導を大いに活性化することができるが、技術の劣る教師は、たとえ理想的な教科書を手にしたとしても、結局その精神や視点を獲得できず、授業も成功しないであろうからである。」と述べた³⁷⁾。

このように、委員会は、報告書に沿った教科書がない現状では、未熟な教師が自らカリキュラムを編成することが困難であると認めていた。ゆえに委員会は、既に先進的な教科書が複数開発されていた公民科「コミュニティ・シヴィックス」に大きな期待を寄せている³⁸⁾。社会科委員会が公民科を重視した背景の一つがここにある。では、社会科委員会が理想とする教科書とはどのようなものか。委員会は以下のように述べる。

本委員会は、私たちが把握している現在の動向に基づいて、初等教育と中等教育における歴史や社会諸科学の領域の授業が、これまで以上に明確に子どもたちの即時的な興味関心や必要性に応じて組織化されるだろうと信じている。それゆえに、それらの指導は、様々な時期、様々なクラス、様々な生徒の実態といった、限定された環境に応じて変えなければならない。その結果、未来の教科書は情報を概説する部分を次第に減らしていき、教育方法のマニュアルや教師のための説明資料、生徒が観察をしたり学習するための手引きとなる部分が次第に増えていくだろう³⁹⁾。

このように社会科委員会が理想とする教科書は、情報資料としての媒体ではなく、マニュアルや教材リストに近いものであったと想定される。

その上で、社会科委員会が危惧しているのは、教科書が必要ないとする考え方であった。社会科委員会は、教科書が

正しく使われるならば、学習を助けるという証明が、理論的にも実践的にもなされていると指摘した後に、以下のように述べている。

仮に現存する教科書に従うにしても、そうするよりも、教科書なしの方がより良い授業のできる非常に多くの経験を持ち、才能のある教師も例外的にいるだろう。しかし、そのような教師でさえも、生徒が良く計画された教科書を持っていれば、更に上手くできるだろう。また、大半の教師は、自らの力で教育課程を編成する訓練を受けていない。教師が非常に良質の教科書を利用できず、かつ、生徒の長所を引き立たせて、生徒の必要性に応えることができない場合、その教師に自力で教育課程を作成する能力を期待することなど、ほぼ不可能である。そして、そのことは、教師が最高の教科書を得られる価値や機会をいかなる点からも補うことが困難であることを意味している⁴⁰⁾。

先に示したように、NEAの社会科委員会は、実践の固定化を危惧し、大まかな原理を示すに留めつつ、実践者の着想を刺激するような実践例と利用可能な教材を提供することであった⁴¹⁾。

ただ一方で、社会科委員会が教科書を求めていた点は非常に興味深い点である。実際、社会科委員会は、教師の創意工夫に基づくカリキュラム開発を認めているが、教科書なしで授業できる教師を例外的な人材だと捉えたり、大半の教師は、自らの力で教育課程を編成する状況にないことを認めていた。

教師の自主裁量の幅を強調しつつも、現実的な観点から教科書開発の必要性を訴えている社会科委員会の主張は、補助の無い状況で、教師が自主的に解釈し、カリキュラム・デザインが困難であることを示している。

2) 教員養成について

なお、社会科委員会は学校や地域の置かれた文脈や、生徒の必要性や興味関心によって、教師が自主主体的に判断する自主裁量の幅を大きく捉えていた。それにもかかわらず、そういった教員をどのように養成し、研修を進めるべきかという点については、委員会は控えめな言及をするに留まっている。報告書では以下のような言及がなされている。

社会科を活性化する際に最も大きな障害となるのは、おそらく教師の準備が不足していることである。その理由の一部としては、社会生活における事実と法則（これらは、歴史学や他の社会科学が発見し、定式化した）についての訓練が教師に不足していることがある⁴²⁾。

教員養成校で特に注目が向けられるべきは、初等学校と中等学校の子どもの「現在の成長の必要」に応じた社会科の授業方法についてである⁴³⁾。

このように、社会科委員会が具体的に何かの教員養成に対する提案をした訳ではなく、現状が不十分であることを指摘するに留まっていた。実際、社会科委員会は、「結局のところ、社会科教育の最も効果的な教育が、この特別な分野で訓練を受けた指導主事や指導者がいるところで、確保されることはまぎれもない事実である。」と述べていた⁴⁴⁾。教師の自主裁量を重視しているにもかかわらず、活用できる教材や教員養成の方法や研修の方法について言及できなかった点において、1916年の社会科委員会報告書の理論的境界は顕著であった。

3) 小括：文脈と柔軟性を重視したカリキュラム構想の課題

以上のように、NEAの社会科委員会は、デューイの教育思想を基礎としつつ、緩やかな教科目標を掲げ、教師の自主裁量を重視するスタンスをとっていた。これらのスタンスをとることによって、社会科委員会は、特定の教育観を否定することなく、多様な社会経済的な状況の実践に対応するものとなった。

一方、教師の自主裁量や解釈の幅を認めつつも、優れた教科書の必要性を提起していた点は注目すべき点である。立場や文脈の異なる教師を縛ることなく、それでいて、教師の授業の選択肢を広げるような、教材開発が求められていたと言える。また同時に、「生徒の現在の必要性」を見極めるためには、教員養成が不可欠と考えられたが、その点に関して、社会科委員会は具体的な提案をすることはできていなかった。その点において、社会科委員会は「教材開発」と「教員養成」に大きな限界を抱えていた。

2. ハロルド・ラッグのカリキュラム構想

(1) 専門家による事前のカリキュラム・デザインの必要性

次に、カリキュラム研究者であると同時に、社会科教育のカリキュラム開発者でもあったハロルド・ラッグのカリキュラム構想を見ていきたい。これまで、わが国の社会科教育研究では、1920～40年代に活躍したハロルド・ラッグが、普遍性・一般性を持ったカリキュラムの構成原理を提示した点を高く評価してきた⁴⁵⁾。また、よく知られる通り、ラッグは、1920年～30年代にかけて、大規模な社会科教科書シリーズの開発・出版を行った。そしてラッグは、NEAの社会科委員会を含む従来の委員会が、カリキュラムの教材選択や構成原理を確定するための手続きや事前調査が不十分であることを批判した⁴⁶⁾。その批判の代案として、ラッグが提案したのが「設計」「デザイン」としてのカリキュラム観であり、それを作成する専門家としての「カリキュラム作成者」の存在であった。ラッグは以下のように述べている。

エンジニアが橋や工場をデザインするのと同様の意味で、プログラムはデザインされる。カリキュラムの開発は科学技術の問題と見なされ、デザインは事前になされる必要がある。

カリキュラム作成における主要な創造的な活動とは、デザインをすることである。私たちが取り組む課題を達成するためには、カリキュラムをデザインしなければならない⁴⁷⁾。

このように、ラッグにとっては、科学的な手続きに基づいて、一般性を持ったカリキュラム原理が設計される必要があった。そして彼が、それらの研究活動の中で必要だと論じたのが、「カリキュラム作成者 (curriculum designer)」と呼ばれる専門家が、カリキュラムを「授業がなされる前に、前もって」デザインすることであった。ラッグにとって、カリキュラム作成者とは、教師が子供の興味を事前に発見して授業を構成する一方で、この仕事とは相対的に独自の立場から教育内容を設計 (design) する専門家であった⁴⁸⁾。これに関して、渡部も、「ラッグは、事前でのカリキュラムや単元のデザインの質が授業の良し悪しを大きく左右すると信じていた。」と述べている⁴⁹⁾。

そして、カリキュラム作成者は、現代社会における主要な問題が何かを把握する社会研究者であると同時に、子どもの

発達段階や興味関心にも詳しい心理学研究者でもある必要があった⁵⁰⁾。またラッグは、カリキュラム作成者に関して、「その仕事は実際には難しい。これらの仕事は、幅広い知識と、豊かな経験、人間科学や物理科学に関する専門的な訓練を受けた人によってのみ、成し遂げることができる。」とも述べている⁵¹⁾。以上の厳しい条件を考慮に入れると、ラッグが教師以外のカリキュラムの専門家が必要とした理由も理解できる。

実際、ラッグの提案するカリキュラム構成の手順は非常に緻密である。例えば、一方では、学習で取り上げるべき現代アメリカ社会の社会問題を決定するために、大量の書籍・雑誌から抽出を行い、他方では、子どもの発達段階に即したカリキュラムの構成を行おうとした⁵²⁾。

このように、ラッグが述べる「カリキュラムのデザイン」とは、人工的な設計をする想定の前で捉えられた言葉であった⁵³⁾。このようなラッグの考え方は、後年においても一貫している⁵⁴⁾。

以上のように、ラッグにとって、カリキュラムを事前に設計すべきものとして捉えており、その設計に当たってはカリキュラム構成をする「専門家」が、「前もって」カリキュラムを計画する必要であると捉えていた。ここに、ギデンズの言う「専門家システムへの信頼」を感じさせる側面を見ることが出来る。

(2) カリキュラムにとっての教師の位置づけ

先の通り、ラッグは教師が授業を実践する以前の段階において、専門家があらかじめ作成したカリキュラムの原理の必要性を主張していた。この際に重要になるのが、ラッグが専門家主義の立場をとればとるほど、教師のカリキュラム構成力を低く見ていたのではないか、という点である。先行研究においては、実際にその点を懐疑的に捉える研究は少なくない。例えば、マリー・ネルソンは、ラッグが自分が開発した社会科教材を学校教師たちが理解したり、適切に利用することができないと想定していたと認めていた点を指摘している⁵⁵⁾。他にも、ダイアン・ラヴィッチは、「彼は、自分と同じようには世界を理解していない無知な大衆に対する、ある種の知的な傲慢さや見下した態度が、彼自身のうちに潜んでいることに気づいていなかった。」と述べている⁵⁶⁾。また、ステーブン・ソートンは、ラッグに関して、「教師が自発的にカリキュラムを作成していくことや、それによって彼らが上手く

カリキュラムを構成し、順次的に実質的成果を生み出すことを期待するのは非現実的であると結論付けた。」と評価している⁵⁷⁾。

ただ、ラッグは、それらの一般性・普遍性を持った原理を重視してはいるものの、それらが教師の自主性・主体性を完全に無視したものではなかった。それに関して、ラッグは、「カリキュラム作成の強調点」と題する論文において、詳しい説明をしている。ラッグはそこで、カリキュラム作成時に全体枠組みを計画する必要があることを主張しつつも、「もちろん、このことは、教科に関する厳格な枠組み（つまり読み物や課題など）について、教師が一言一句その通りに生徒に学習させるべきであるという意味ではない⁵⁸⁾。」と述べている。その上で、ラッグは以下のように述べている。

このことは以下のことを意図している。すなわち教師は、仕事を始めた当初には、提案された諸活動が載ったアウトラインを片手に携え、その年度の自分の受け持つ学級の特別な必要性に合わせて、その選択肢の中から特定の諸活動を選択するだろうと。さらに、彼女（＝教師：筆者註）が教育内容を選んだ諸活動のリストは、事前に徹底的に分析されている。そのため、教師たちは、授業内のあらゆる活動において、望まれる成果を出すための確証を得ることができるのだ⁵⁹⁾。

このように、ラッグは、学習のアウトラインや厳選された活動リストを携えて授業を行うことによって、教師の担当する学級の特殊な必要性に合わせた学習を行うことを意図していた。実際、ラッグは、彼が参加したカリキュラム作成委員会の報告書において、カリキュラムの事前の作成が必要であることを認めつつ、以下のように述べた。

私は、カリキュラムとは、出来る限り日々の学級の中で発展されるべきであるということを、力強く主張すべきであると信じている⁶⁰⁾。

また生徒たちの即時的で具体的な必要を生むことになる日々の利害関心や生活状態を反映したカリキュラムの部分については、毎日作られていくべきであるし、そうやってでしか作ることができない⁶¹⁾。

このようなラッグの指摘から、ラッグが日々の学校現場の実践の中で、カリキュラムが絶えず発展すると捉えていると言える⁶²⁾。

先のように、ラッグは「前もって」「専門家による」カリキュラムのデザインが必要だと考えていた。では、そのようなデザインの必要性はどのような状況認識に基づいて、なされていたのだろうか。

実際、ラッグにとって、特に批判すべきは「カリキュラムは前もって計画すべきではなく、その場でのみ作ることが可能である」と捉える極端な教育者たちであった。この仮想敵としては児童中心主義の実践家が想定されていた⁶³⁾。ラッグは、これらの児童中心主義者たちの議論を全否定していたというよりも、現実の学校現場の実態と乖離していることに言及している。例えば、ラッグは以下のように述べた。

カリキュラムが現場でのみ作られるべきという見方は、才能に満ちた教師、すなわち、子どもの生活や発達について詳しい知識や、幼少期から社会的成熟を遂げるための複数の道筋に関する幅広い構想を持ち、心理学に関する理解や、児童たちを取りまとめる稀有なスキルを兼ね備えた教師を前提にしている⁶⁴⁾。

このように、ラッグは、現場でカリキュラムを構築しようとする立場の人々の主張を、全て否定しようとしたのではない。そうではなく、大多数の教師にとって一からカリキュラム開発を行うことは非現実的である、というのがラッグの主張であった。また、「カリキュラムが現場でのみ作られるべき」という考え方は小規模の学級を想定しており、大衆教育（mass education）となった現状では不適切であるとも述べている⁶⁵⁾。さらに、ラッグのカリキュラム開発の意図が、学校環境や教育設備の不足した教師に対して、とりわけ向けられたものであった。

このようにラッグが普遍的なカリキュラム原理を提案しようと思った背景には、現実の教師のレベルや教育環境の実態に対する現実主義的な認識があった⁶⁶⁾。

(3) 科学性・系統性を重視したカリキュラムに生じる現実的問題

では、ラッグは教材開発をするだけでなく、それを使いこ

なすための教員養成に取り組んだのだろうか。

ラッグは1950年代に『教師たちの教師』という著作を執筆し、教師教育論についても、議論を展開している。『教師たちの教師』では、1920年代までの教師教育とそれ以後の教師教育を取り巻く社会科学の理論などが変化しつつあること、創造的思考に関する研究が進みつつあることなどが論じられている。また、ラッグは『教師たちの教師』を通して、若い教師が創造的な思考の道へと導かれたり、本書が教師教育に関する議論が起るきっかけになることを期待していた。ただ、設計したカリキュラムを活用する教師を育成するために、どのように教師教育を行うかという点については、具体性のある提言はなされていない⁶⁷⁾。

これらのラッグの教師教育への関与について、ネルソンは厳しい批判をしている。これらの批判は、ラッグが本質的には教師の教材活用のプロセスには、十分には関与できていなかった点を指摘するものであった。

最も目立つ問題は、新しい社会科の枠組みにおける教師の位置づけについてである。1920年代～30年代において、ラッグの教材は新しく刺激的なものだったが、教師はそれを扱うように訓練されていなかった。ラッグは、Ginn and Companyの教師用ガイドの出版によって、彼の教材の耐教師性 (teacher proof) を高めようと試みた。彼は、個別の社会科学をバラバラに学んだ教師が、それと正反対の訓練 (筆者註：つまり、領域横断的な社会科授業の訓練) をする準備が不十分であったことを認めている⁶⁸⁾。

これに加えて、ネルソンは、ハロルド・ラッグの弟であるエール・ラッグへのインタビュー調査を通して、以下のことを述べている。

ラッグは彼の弟であるエール・ラッグに対して、彼が開発した社会科教材を教師が理解することができ、適切に教えることができるだろうと想定したことが間違いであったと認めている。エール・ラッグが思い出して語ってくれたのは以下のことである。

ハロルド・ラッグが生前に述べたのは、社会科パンフレットの教科書シリーズがうまく機能しなかった本当の理由としては、教師たちがそれを扱う方法を知らなかったからだということだ

った。彼らは歴史や政治学を専門としており、わずかな公民科、経済学、社会学と合わせて、主に歴史を教えるために訓練されていた。そのため、社会科を教える方法を理解できなかった⁶⁹⁾。

ラッグは、「人間と変化する社会」の教科書シリーズに合わせて教師用ガイドに何らかの努力をしようとした。しかしながら、ラッグはその教え方について説明することができなかった⁷⁰⁾。

もちろん、先に述べたように、ラッグはカリキュラムにおける教師の役割を重要だと論じていた。ただ、実際のところ、そのような教師の日々の試行錯誤や教師の職能発達に関して、ラッグは課題意識をもっていたものの、それに対して、具体的な提言やプログラム開発などをしたわけではなかった。

以上の通り、ラッグは、社会科教科書や教師用ガイドを出版することによって、授業の補助となる教材を大量に開発していった。また同時に、それらのカリキュラムをそのまま使うのではなく、教師自身が解釈して使い分けるように意図していた。しかしながら、ラッグは教師自身のカリキュラムの自主的なデザインを求めている一方で、その能力育成のための教員養成については、具体的な言及ができていなかった。NEA 社会科委員会の限界として「教材開発」「教員養成」の二点を挙げたが、ラッグは「教員養成」に関しては課題を残すことになった。

IV. その後の動向について

その後の研究者たちは、1960年代～70年代の「教育の現代化」の時代を経て、一般化されたカリキュラム開発を減らして、実際に学校でどのような実践が行われているのかを実証的に調査する研究へと量的にシフトしていく。

これらの経緯については、渡部が述べるように、1970年代までに様々なカリキュラムが教師の外側から提案されたが、学校現場を変えなかったという事実が浮き彫りになった結果でもあった⁷¹⁾。いずれも、様々なアプローチの違いがあり、例えば、子どもの思考や教師の専門性に関する実証研究を行う研究もあれば、現場教師の実際に行われている授業づくりに貢献をめざす研究もあるとされた⁷²⁾。これらに関しては、II章でも述べた通り、わが国におけるアクション・リサーチや参与観察に基づく質的研究が促されるようになった文脈とも

共通していると考えられる。

V. 結論

1. 近代におけるカリキュラム研究が内包していた複数性

以上のことから、合理主義的ないわゆる「近代的」なカリキュラム研究と、解釈的で「現代・ポストモダン」的なカリキュラム研究は、カリキュラム研究史において、元々から複数化していたと捉えるのが妥当ではないだろうか。実際、教師の自主裁量を重視していた NEA 社会科委員会も、優れた教材の必要性を認めていたし、カリキュラムの工学的デザインを重視していたハロルド・ラッグも、教師による絶えざるカリキュラム開発を必要だと考えていた。

むしろ、これまでの先行研究がそれぞれのカリキュラムの局所（例えば、NEA 社会科委員会報告書の多義性や、ラッグの完成された教材など）に注目する場面もあったと思われる。少なくとも、米国の 20 世紀前半のカリキュラム研究が全て科学性・合理性のみを追求したわけではない。カリキュラム研究におけるパラダイムの「シフト」「転換」が論じられるのは、1970 年代に入ってからのものであるが、実態としては、それ以前の段階から、「後期近代」を含む近代の中で、工学的なカリキュラム研究と解釈的なカリキュラム研究とが混在していたと思われる。

2. 本稿の成果と意義

同時に、本研究は、1970 年代以前で「近代」と「現代」と区切るカリキュラム研究史観に対し、異なる立場を示すものとなる。

現在が後期近代という形で、大枠としての近代に含まれるとした場合、その中には、合理主義を追求するカリキュラム観と、それに対抗するカリキュラム観とが、接近や差別化を繰り返しながら、構築されてきたと捉えることができる。

今後も、「(狭義の)近代のカリキュラム研究=工学的なカリキュラム研究」という単純化された認識を再定義しつつ、教師自身の解釈の幅や文脈依存性を当時の教育関係者がどのように捉えていたのかについて、更なる考察を進める必要があると考える。

注

1) 長尾彰夫(1995)「カリキュラム研究方法論批判」『カリキュ

ラム研究』4:45.

- 2) 佐藤学(1996)『教育方法学』岩波書店:47.
- 3) Pinar, W. F. (1995). (Eds). *Understanding curriculum: An introduction to the study of historical and contemporary curriculum discourses*. Peter Lang, New York.
- 4) 西岡加名恵(2017)「教育課程をどう編成するか」田中耕治他編『新しい時代の教育課程 第3版』有斐閣.
- 5) 松下佳代(2007)「カリキュラム研究の現在」『教育学研究』74(4):141
- 6) 佐藤学(1999)「カリキュラム研究と教師」安彦忠彦編『新版 カリキュラム研究入門』勁草書房:157-158.
- 7) 佐藤学(1999)「カリキュラム研究と教師」157-158. 佐藤学(1996)『カリキュラム批評』世織書房.
- 8) 安彦忠彦「カリキュラムの歴史的研究」安彦忠彦編『新版 カリキュラム研究入門』勁草書房.
- 9) 松下佳代(2007)「カリキュラム研究の現在」141-142
- 10) 安彦忠彦(1999)「カリキュラムの歴史的研究」26.
- 11) 安彦忠彦(1985)「カリキュラム研究の史的概観」安彦忠彦編『カリキュラム研究入門』勁草書房, 11-12.
- 12) Tyler, R. (1949). *Basic Principles of Curriculum and Instruction*, University of Chicago Press, Chicago. ラルフ・W・タイラー著:金子孫司監訳(1968)『現代カリキュラム研究の基礎:教育課程編成のために』日本教育経営協会:iv.
- 13) 安彦忠彦(1999)「カリキュラムの歴史的研究」14-15.
- 14) 佐藤学(1999)「カリキュラム研究と教師」157-158
- 15) 安彦忠彦(1999)「カリキュラムの歴史的研究」19-20.
- 16) 佐藤学(1999)「カリキュラム研究と教師研究」157.
- 17) 松下佳代(2007)「カリキュラム研究の現在」142.
- 18) 安彦忠彦(1999)「カリキュラムの歴史的研究」20. 松下佳代(2007)「カリキュラム研究の現在」142-143.
- 19) 安彦忠彦(1999)「カリキュラムの歴史的研究」12. 佐藤学『教育方法学』18-20.
- 20) アンソニー・ギデンズ著:松尾精文他訳(1993)『近代とはいかなる時代か?』而立書房.
- 21) アンソニー・ギデンズ著:松尾精文他訳(1994)『左派右派を超えて』而立書房.
- 22) 大井英晴(2004)「ポストモダン」木田元編『哲学キーワード事典』新書館:336.
- 23) ジョン・デューイ著:市村尚久訳(1998)『学校と社会・子どもとカリキュラム』講談社.
- 24) 苫野一徳(2014)『教育の力』講談社:128.
- 25) N.E.A. (1913). *The Reorganization of Secondary Education, Preliminary Statements by Chairmen of Committees The Commission of The National Education Association, U.S., Bureau of Education, Bulletin, No. 41.*
- 26) N.E.A. (1915). *The Teaching of Community Civics, Prepared by a Special Committee of the Commission on the Reorganization of Secondary Education, U.S., Bureau of Education, Bulletin, No. 23.* アーサー・W・ダン他著:渡部竜也編訳(2016)『世界初 市民性教育の国家規模カリキュラム:20世紀初期アメリカ NEA 社会科委員会報告書の事例から』春風社.
- 27) N.E.A. (1916). *The Social Studies in Secondary Education, Report of the Committee on Social Studies of the Commission*

- on the Reorganization of Secondary Education of The National Education Association, U.S. Bureau of Education, Bulletin, No. 23. アーサー・W・ダン他著：渡部竜也編訳（2016）『世界初 市民性教育の国家規模カリキュラム：20世紀初期アメリカ NEA 社会科委員会報告書の事例から』春風社。なお、本報告書の訳文については、訳書を参考にしつつ、場合に応じて、本稿独自の訳に変更している。
- 28) N.E.A., *The Social Studies in Secondary Education*, p. 9.
 - 29) *Ibid.*, p. 10.
 - 30) これらの分析に関しては、齊藤仁一郎（2016）「生徒の多様化に対応するアメリカ社会科成立期のカリキュラム」日本社会科教育学会『社会科教育研究』127. が詳しい。
 - 31) 赤沢早人（2004）「1910年代から1920年代の米国社会科論における子どもの興味の位置」『関西教育学会研究紀要』4：3.
 - 32) Fallace, T. (2009). John Dewey's Influence on the Origins of Social Studies: An Analysis of the Historiography and New Interpretation, *Review of Educational Research*, vol. 79. No. 2, pp. 601-624.
 - 33) N.E.A., *The Social Studies in Secondary Education*, p. 11.
 - 34) Fallace, T. (2009). John Dewey's Influence on the Origins of Social Studies, p. 614.
 - 35) ただ、赤沢は本報告書について、「デューイの教育思想に基づいたとしながらも、興味のとらえ方については、明らかにデューイのいう子どもと対象（教材）間の相互作用と『状態』としての興味ではなく、彼によって批判された従来の（『属性』としての）興味論の立場にとるものであった。」と述べ、デューイの興味論と本報告書の立場とを峻別している。（赤沢早人（2004）「1910年代から1920年代の米国社会科論における子どもの興味の位置—『中等教育改造審議会社会科委員会報告書』とハロルド・ラッグの社会科論に焦点を当てて」6.）
 - 36) N.E.A., *The Social Studies in Secondary Education*, p. 60.
 - 37) *Ibid.*, p. 60.
 - 38) 実際、委員会は「委員会としては、まずコミュニティ・シヴィックスを導入することで、教育課程の再組織化を図り、社会科実施の障害を取り除くことから始めることを推奨している」と述べている。（*Ibid.*, p. 61.）.
 - 39) N.E.A., *The Social Studies in Secondary Education*, pp. 61-62.
 - 40) *Ibid.*, p. 62.
 - 41) 詳しくは、例えば、齊藤仁一郎（2016）「生徒の多様化に対応するアメリカ社会科成立期のカリキュラム」。
 - 42) N.E.A., *The Social Studies in Secondary Education*, p. 58.
 - 43) *Ibid.*, p. 59.
 - 44) *Ibid.*, p. 60.
 - 45) このような視点は、古くは三浦軍三の研究から、近年では溝上泰の研究など、幅広くみられる傾向である。（三浦軍三（1977）「合衆国における統合社会科論に関する考察」東京教育大学『教育学研究集録』17集。溝上泰（2007）『ハロルド・ラッグ社会科カリキュラム成立過程の研究』風間書房。P. F. Carbone, Jr. (1977). *The Social and Educational Thought of Harold Rugg*, Duke University Press.）
 - 46) Harold Rugg. (1921). "How Shall we reconstruct the social studies curriculum?" *Historical Outlook*, 12.
 - 47) Harold Rugg. (1939). "Curriculum-Design in the Social Science: What I believe," James A. Michener (eds), *The future of the social studies: proposals for an experimental social studies curriculum*, National Council for the Social Studies, p. 148.
 - 48) 赤沢早人「1910年代から1920年代の米国社会科論における子どもの興味の位置」8. この点に関して、ラヴィッチも「社会と子どもの要求を見極めるという複雑な仕事は、普通の教師や地方の学校関係者によって成し遂げられることは無く、大学の教育課程で要請された、それを本職とする専門家によってのみ適切に行われるというわけである。」と述べている。（ダイアン・ラヴィッチ著：末藤美津子他訳（2008）『学校改革構想の100年』東信堂：199.）
 - 49) 渡部竜也（2017）「米国社会科研究におけるカリキュラム開発研究の隆盛と衰退」『社会科教育論叢』50：30.
 - 50) Harold Rugg. (1926). "Curriculum-Making: Points of Emphasis," *The Twenty-sixth Yearbook of National Society for the Study of Education, The foundations and technique of Curriculum-Construction*, Part1 Curriculum-Making: Past and Present, Public school publishing company; Bloomington, Illinois, p. 160.
 - 51) Rugg H. (1936). *American Life and the School Curriculum*, Ginn and Company, Boston.
 - 52) 小田泰司（2010）「アメリカ社会科教育史研究における新たな研究方法の可能性」全国社会科教育学会『社会科教育論叢』47.
 - 53) ラッグの「カリキュラム・デザイン」に関して、創造的芸術的な活動であったと捉える解釈もある。例えば佐藤は、ラッグの「カリキュラム・デザイン」を「創造的芸術活動をモデルとしていた。」と論じている。（佐藤学（1985）「カリキュラム開発と授業研究」安彦忠彦編『カリキュラム研究入門』勁草書房, 95-96.）.
 - 54) Harold Rugg. (1947). *Foundation for American Education*, World Book Company, New York, p. 651. Harold Rugg. (1952). *The Teacher of Teachers; Frontiers of Theory and Practice in Teacher Education*, Harper & Brothers, Publishers, New York, p. 16.
 - 55) M. R. Nelson, (1975). *Building a Science of Society: the Social Studies and Harold O. Rugg*, Dissertation, p. 189.
 - 56) ダイアン・ラヴィッチ著：末藤美津子他訳『学校改革構想の100年』204.
 - 57) スティーブン・J・ソーントン著：渡部竜也他訳（2012）『教師のゲートキーピング：主体的な学習者を生む社会科カリキュラムに向けて』春風社, 65.
 - 58) Harold Rugg, "Curriculum-Making: Points of Emphasis," pp. 159-160.
 - 59) *Ibid.*, p. 160.
 - 60) *Ibid.*, p. 158.
 - 61) N.S.S.E., *The Twenty-sixth Yearbook of National Society for the Study of Education, The foundations and technique of Curriculum-Construction*, Part2 The foundation of curriculum-making, pp. 19-20.
 - 62) ラッグは、同様の指摘をこのようなカリキュラムにとっての教師の重要性については、『アメリカ人の生活と学校カリキュラム』においても言及している。例えば、以下のように述べている。

「社会、子ども、カリキュラム、学校と、主な教育的過程の諸要素について簡潔に考えていく中で、私たちは教師というところにたどり着く。教師こそが、本当の意味で学校そのものだ——教育的過程を壊すのも作り出すのも教師である——という事実は、まったくもって当然のことと考えられる。カリキュラムを作り、そして活動を計画し、そして教育を実施するにあたって手段として活用する教材を選択するのは教師であるし、またそうあるべきである。子どもたちや若者たちと常に一緒にいて、静かに彼らを世界に向けて方向付け、何をすべきか指示し、成績を付け、生徒の強い部分と弱い部分とを確認し、カウンセリングするのも、教師である。教師の出す事例や考えが広まることで、学校は若者たちの価値的な態度を創出していく。ある種の実体のない意味や感情が少しずつ浸透することによって、精力的な教師は若者の考えや気性に影響を与える。実際のところ、生徒たちの生活の全範囲の中で教師が触れることのない側面はないのである。」(Rugg H. (1936) *American Life and the School Curriculum*, Ginn and Company, Boston, p. 26.)

- 63) このような指摘は、たとえば、Harold O. Rugg & Ann Shumaker. (1928), *The Child-centered School: An Appraisal of the New Education*, World Book Company, New York. 佐藤学 (1994) 『米国カリキュラム改造史研究』 東京大学出版会: 182. それに関して、溝上は、ラッグが活動プログラムを作成するにあたっては、学校における青少年の活動概要が予め計画化される必要があったことを指摘した。その上で溝上は、「ラッグの立場は明らかに進歩主義とは異なっている。」と結論付けている (溝上泰『ハロルド・ラッグ社会科カリキュラム成立過程の研究』 p. 273.
- 64) Harold Rugg, "Curriculum-Making: Points of Emphasis," p. 159.
- 65) *Ibid.*, p. 160.
- 66) *Ibid.*, p. 160.
- 67) これに関して、ネルソンは本書におけるラッグの議論を「有益さに欠けている」と否定的な評価をしている (M. R. Nelson, *Building a Science of Society: the Social Studies and Harold O. Rugg*, p. 193.). また、エバンズは、ティーチャーズカレッジの大学院と類似した教師教育のプログラムを提案しており、教師教育者の主な仕事は、社会改造の必要性を教師に理解させる手助けをすることであると評価している (R. W. Evans. (2007). *This happened in America, Harold Rugg and the Censure of Social Studies*, Charlotte, North Carolina; Information Age Publishing, Inc. pp. 267.). いずれにしても、具体的にどのような教師教育の実践を行うべきかについて、十分な言及がなされていないように思われる。
- 68) M. R. Nelson, *Building a Science of Society: the Social Studies and Harold O. Rugg*, pp. 214.
- 69) *Ibid.*, pp. 189-190.
- 70) *Ibid.*, pp. 190.
- 71) 渡部竜也 (2017) 「米国社会科研究におけるカリキュラム開発研究の隆盛と衰退」 34.
- 72) 渡部竜也 (2017) 「米国社会科研究におけるカリキュラム開発研究の隆盛と衰退」 36.

東海大学古代エジプト及び中近東コレクション所蔵の硫黄ビーズ製 ネックレス復元研究

—本学における文化財保存修復のモデルケースとして—

山花京子*1, 秋山泰伸*2

(*1 東海大学文学部アジア文明学科准教授, *2 東海大学工学部応用化学学科教授)

[研究ノート]

Reproduction of Ancient Egyptian sulfur necklace: As an Example of Interdisciplinary Collaboration

Kyoko YAMAHANA*1 and Yasunobu AKIYAMA*2

*1 Associate Professor, Department of Asian Civilization, School of Letters, Tokai University

*2 Professor, Department of Applied Chemistry, School of Engineering, Tokai University

This is a report of the interdisciplinary project between Humanities and Science departments within Tokai University to replicate the ancient Egyptian sulfur necklace. First, the author made typological observation of four types of sulfur beads, studied the parallels stored in the museums worldwide, and estimated that the beads were manufactured during Ptolemaic to early Roman periods. Next, Dr. Akiyama at the Department of Applied Chemistry made analysis on the actual remains, created 3D replicas and moulds of those beads. Then we could successfully make the exact copy of the beads by pouring molten sulfur into moulds. By gathering information of ancient sulfur usage archaeologically and by knowing the chemical behaviour of sulfur, we could achieve in presenting the reconstructed ancient sulfur necklace - a broad collar necklace- with replicated sulfur beads. This article is to show an example of how researchers in different fields could work together to study ancient material remains.

Accepted, Jan. 12, 2018

はじめに

東海大学には数千点もの文化財が所蔵されている。これら「人類の遺産」を活用することは、東海大学が「開かれた大学」として機能し、その存在価値を国内外にアピールするためには欠かせない文化事業の柱である。2013年から2015年にかけて本学所蔵の古代エジプト及び中近東コレクション（略称 AENET、本文では以下 AENET とする）内のパピルス文書を学生の手によって修復保存するという、東アジア地域で初めての画期的なプロジェクト¹を遂行した。その後、2016年より山花研究室では、AENET内の遺物の修復および活用を目的とし、理系研究室との共同研究を行う「文理融合研究」を継続的に推進している。本稿では工学部応用化学学科秋山研究室と共同研究中の硫黄ビーズ製ネックレスについて研究事例を紹介し、本学のような総合大学において「文理融合」の共同研究を行う意義と教育的効果についても

述べる。

I. AENET 所蔵の硫黄製ビーズ

本学 AENET コレクションには硫黄製ビーズネックレスが2連収蔵されている（SK10-1, SK176）。古代エジプトは他の古代文明と比較して物質文化が豊かであるため、墓より出土する遺物の数が非常に多く、それゆえに世界中の博物館・美術館には古代エジプトの遺物が多く所蔵されているのだが、世界中のコレクションを見渡しても AENET コレクションの硫黄製ビーズネックレスの類例は非常に少ない。硫黄製ビーズネックレスの類例は、平山郁夫シルクロード美術館、KOBE トンボ玉ミュージアム（羽原コレクション）、ルーヴル美術館²、そしてカイロ博物館に収蔵されているのみである。残念なことに、いずれの館の記録にも硫黄製ビーズネックレスの出土地や収蔵年月日に関わる詳細は残っておらず、出自がわからない。しかし、世界的に見て類例が非常に少ないこと、硫黄という特殊な素材で作られていること、ビーズの形状とサイズが同一であること、さらにカイロ博物館と AENET の収蔵品はビーズをつなぐ紐の形状が酷似して

本研究ノートは、『文明』投稿規定に基づき、レフェリーの査読を受けたものである。原稿受理日：2018年1月12日

いることなどから推察して、世界に分散している硫黄製ビーズは、かつては1つ（あるいは1セット）の装飾品を構成していた可能性が高く、その製作地も同一であったことは想像に難くない。

古代エジプトでネックレス用のビーズの歴史は古く、先王朝時代（紀元前 5500 年頃）から自然石に穴を開け、紐でつないで身を飾っていたことは数多くの埋葬例から明らかである。当初は自然の形のままの石を穿孔してネックレス（あるいはペンダント³）として使用していたが、次第に石を研磨して成形するようになる。初期の造形にはハヤブサの形（ハヤブサはホルス神として王朝成立後は神格化される）など、後の王朝時代に入って神と崇められる動物を象るようになることから、これらビーズで作った装飾品は宗教的な意味付けがあったことが伺える。さらに王朝時代成立前（紀元前 4500 年頃）にはファイアンスと呼ばれる石英粉主体の焼き物で様々な形のビーズを作るようになった。

ネックレスの素材は先王朝時代より王朝時代が終わるまでほとんど変化はなく、石製、歯骨角製、金属製、ファイアンス製、ガラス製である。本稿で取り上げる硫黄製のビーズは希少価値の高いものと言ってよい。

さて、AENET 登録番号 SK10-1 および SK176（図 1）の硫黄ビーズ製ネックレスは、現在は 2 連として収蔵されている。すべて硫黄で作られており、直径約 1.2cm で 12 花卉の花形に直径 0.2cm ほどのビーズが埋め込まれているものと、牛の頭を象ったビーズ（以降、牛の顔形とする）に大別される。これらと同形、同サイズのものがカイロ博物館（JE71593a-c）、KOBE トンボ玉ミュージアム⁴、平山郁夫シルクロード美術館（NR103112）に収蔵されている。また、カイロ博物館と平山郁夫シルクロード美術館には、本学には所蔵されていない



図 1 東海大学古代エジプト及び中近東コレクション
硫黄製ビーズネックレス SK176（撮影宮原俊一）

ベス神の顔を象ったビーズ（以降、ベス神顔形とする）と小さな 15 花卉の花形（直径 0.7cm）ビーズもある。表 1 にはそれぞれ意匠の種類と数を表記している。以下では、a) 12 花卉花形、b) 牛の顔形、c) ベス神顔形、d) 15 花卉花形についてそれぞれの描写と時代推定に向けた考察を行う。

- a) 12 花卉ビーズについて、花形の意匠は古代エジプトでは非常に古くから使用されている。したがって、この花形ビーズだけでは時代推定を行うことは難しい。ただ、花形の意匠は末期王朝（紀元前 664 ～ 342 年）からプトレマイオス朝（紀元前 304 ～ 30 年）以降、図 2 のハピ・メンの人形棺（ボストン美術館所蔵）⁵ のように胸元の広襟飾り部分の装飾に多用されるようになる。花卉の数は 6 花卉から 16 花卉のバリエーションがあり、花卉の数は時代が下がるにつれ増える傾向にあるが、12 花卉を手掛かりとして特定の時代と結びつけることは難しい。
- b) 牛の顔形のビーズは特徴的で、額の部分には丸い突起が複数見られる。古代エジプトの図像表現において、牡牛と牝牛は角の形で描き分けられることが多く、牡牛の角が比較的短く牛の頭頂に対して水平方向（横

表 1 硫黄製ビーズの類例

所蔵館	AENET (SK 10-1)	AENET (SK 176)	Egyptian Museum, Cairo	平山郁夫 シルクロード 美術館	KOBE トンボ玉 ミュージアム	合計	総合計を 100%とした 時の割合
花形（直径 1.2cm）	50	45	72	28	33	228	66.6%
花形（直径 0.7cm）	0	0	2 (?)	0	0	2 (?)	0.5% (?)
牛の顔形	18	26	46	2	15	107	31.2%
ベス神顔形	0	0	4	1	0	5	1.5%
合計	68	71	124 (?)	31	48	342	100%



図2 ハピ・メンの人形棺に描かれた広襟飾
(ボストン美術館所蔵 筆者撮影)

長)に伸びるのに対して、牝牛の角は牛の頭上に縦方向(縦長)に長く内湾して描かれる。また、正面向きの牛の顔はハトホル(牝牛の姿をとる古代エジプトの神)女神を表わしているのが通例である。プロファイル(横顔)表現を美術規範とする古代エジプトにおいて、唯一ハトホル女神だけが正面向きの顔で描かれるのである。したがって、本稿で検証を行うこの硫黄ビーズもハトホル女神の顔を表現したものかもしれない。ハトホル女神は王朝時代から国母的な存在として王家の庇護下にあった。ハトホル女神の表現は神殿の柱装飾や、ハトホル女神の石製彫刻など、神殿に設置する大型装飾物かハトホル神殿に関連する祭祀具(シストルム)など、神殿などの国家の代表的な建造物に関連して使用された。それが、第3中間期(紀元前1070年頃～667年)以降においては、ハトホルと同じ母性をつかさどる女神イシスの信仰と習合し、イシス女神の信仰が庶民の間に広がるにつれて、庶民が崇拝することのできる小型の神像が大量に作られるようになった。したがって、本稿の考察の対象としている牝牛型のビーズはイシス=ハトホル女神の信仰が広まった第3中間期(紀元前1070年頃～667年)以降のものと同推察することができる。しかし、元来国家神である神は小さなビーズで表現される事例

は少なく、それらの事例は女神の信仰が大衆化し始めた第3中間期以降である。ボストン美術館所蔵のファイアンス製ハトホル女神ビーズ⁶は、ハトホル女神が小型のビーズとして使用された稀な例だが、これらは第3中間期の末期、第25王朝時代のシャバカ王(紀元前712～698年)がヌビア(現スーダン)のエル・クルルに自らのピラミッドを作り、馬を副葬した際の馬の屍衣(馬の遺体の上に掛けるビーズネット)である。この屍衣用のハトホル女神のビーズは、本稿のビーズもハトホル女神と関連があると仮定した場合、最も近い類例にあたるが、ボストン美術館のものは牛の耳を持った正面向きの人面として表わされているのに対し、本学のコレクションは動物としての牝牛の頭部を象っており、形状は大きく異なる。

- c) ベス神とは、元来西アジア地方の神であったが、次第に古代エジプト社会に定着し、古代エジプトの第3中間期(紀元前1070年頃～667年)以降には家内安全や子宝の神として広く信仰を集めた神である。ベス神は上述のハトホル女神と違い、国家神としての位置付けはなく、あくまで民間信仰において人気を博した。獰猛な顔が邪気を払うとみなされ、舌を出し、威嚇の表情をした顔が強調して描かれる。ベス神の図像は古王国時代末期に現れ、続く中王国時代には獣のような顔つきの人間として表現されていた。続く新王国時代(紀元前1550～1070年頃)以降は全身の表現が獣に近づき、ライオンのようなたてがみを持ち、口を開けて舌を出し、威嚇の表情をした矮人として表現されるようになる。ベス神の顔の表現は末期王朝時代からローマ属領時代初期(紀元前664年～紀元後138年頃)にかけて徐々に縦長から横長になり、たてがみの表現も変化する。その変化に伴い、ベス神の表情は獰猛な獣の表現が薄れ、頭髪を耳の辺りで外側に巻き、頬髯と顎鬚を蓄えた男性のように表現される例が多くなる。本学所蔵の硫黄ビーズは花形と牛形のみで、ベス神顔形は存在しないのだが、平山郁夫シルクロード美術館のコレクションには本学所蔵の硫黄ビーズに酷似した花形と牛形のほかにベス神顔形が1個収蔵されている。筆者は2017年10月にビーズを観察する機会を得た。平山コレクションのベ

ス神顔形ビーズは経年摩耗のため表情のディテールは不明瞭だが、全体的に横長の顔と頭頂で2分割した長髪が耳の辺りで外側に巻いている特徴的な表現が確認できた。したがって、平山コレクションの硫黄製バス神顔形ビーズについては、プトレマイオス朝時代からローマ属領時代初期（紀元前304～紀元後2世紀頃まで）⁷と推定することができる。

- d) 15 花卉の花形は12 花卉のものよりも小さく、直径が0.7cm で厚みが0.3cm である (Keimer, 1939, p. 205)。この形状の花形ビーズは日本にはどこにも収蔵されておらず、カイロ博物館の所蔵品を記録したカイマー (Keimer, 1939, p. 205) の記録から伺い知れるのみである。ただ、彼の記述には15 花卉花形ビーズの個数についての言及がないため、カイロ博物館に実際何個収蔵されているのか不明である。表1の15 花卉花形ビーズの個数に(?) が付けられているのはそのためである。12 花卉の花形ビーズと同じく、時代が下がるにつれ花卉の数が増える傾向がみられるが、それだけで時代特定を行うことはできない。

以上のようなビーズの形状の形態的な考察から、本学所蔵のビーズが王朝時代の末期からそれ以降に作られた可能性が示唆される。さらに、c) のバス神顔形のビーズの形状がプトレマイオス朝時代以降ローマ属領時代までに絞り込むことができるため、考察対象のすべてのビーズもプトレマイオス朝時代（紀元前304～30年）からローマ属領時代初期の紀元前3世紀頃～紀元後2世紀頃と推定することができる。

また、硫黄という特殊な物質を装飾用の素材として使用した例はほとんどなく、石としての硫黄塊が若干発見されている⁸のみである。硫黄はエーベルス外科パピルスの中で、「目の翼状片」の処方箋の材料として記されており⁹、これらの硫黄の産地は紅海沿岸のラス・ジェムサ、ラス・ランガ、ラス・ベナス、そしてカイロ近郊のヘルワンからごく少量採掘されるのみである (Lucas, cited by Keimer, 1939, pp. 204-5)。採掘量がすくないため、古代社会の中での使用も少なかったようだ。したがって、古代エジプト王朝史の中では硫黄でビーズを作る、という発想は非常に稀である。

それでは以下で実際に工学部応用化学科秋山研究室と文

学部アジア文明学科の山花研究室で2016年度から2017年度にかけて行った硫黄ビーズの分析と復元実験について述べる。本稿の主題である硫黄製ビーズの復元を行うにあたって、工学部の秋山研究室から大学院生2名、文学部の山花研究室から学部生1名が参加した。この模様は2016年11月BSジャパン放映の『マゼランの遺伝子』にも記録されている。放送の中での学生のコメントのように、古代の技術を実験で学ぶことによって、文系・理系の学生それぞれに新たな発見があったようだ。まさにアクティブ・ラーニングである。理系学生は「物性」から遺物の解釈を行う一方、文系の学生は、歴史のコンテキストの中での遺物の位置づけと技術がもたらした社会変革を考えることを目標とした。

II. 共同研究による復元実験

工学部応用化学科の秋山泰伸教授らと筆者は2016年より東海大学総合研究機構プロジェクト「研究の峰」での文理融合共同研究プロジェクトを推進している¹⁰。

AENET コレクションの硫黄製品を工学部応用化学科の秋山研究室にて、化学の見地から探ることによって、古代技術の解明、そして物質としての硫黄の役割について分析調査が行われることになった。秋山研究室では、まず対象遺物が本当に硫黄であるのかどうか、X線回折分析¹¹によって確認を行い、結晶構造から硫黄であることを断定した。そして、各ビーズの写真を撮り、それらが果たして同じ鋳型を使用しているのかどうか、パターン・マッチング分析を行った。結果、花形は2～3種類の鋳型を使用し、牛の顔形は1つの鋳型を使用してビーズを鋳造していることが分かった。つまり、これらのビーズのうち、少なくとも牛の顔形ビーズについては、同じ場所で作られていることが明確となった。

パターン・マッチング分析の後は「なぜ硫黄が装飾品になるのか」という疑問をもとに、硫黄の結晶を作成することを試みた。硫黄の結晶は透明で黄緑色をしており、ガラスのように輝くため、これを削り成形すると貴石に引けを取らない存在感がある (図3)。硫黄は粉状で試薬として市販されており、これを熱して溶かすと硫黄の結晶は簡単に作るができる。しかし、作成して2日～3日経過すると、硫黄結晶が安定し、針状構造が現れ、当初透明で単斜晶の結晶が次第に斜方晶となり乳濁してしまう (図4)。復元実験に先立ち行った予備実験では、加熱後の硫黄は冷却開始5分頃から



図3 硫黄の単結晶（単方晶）の状態のもの（筆者撮影）

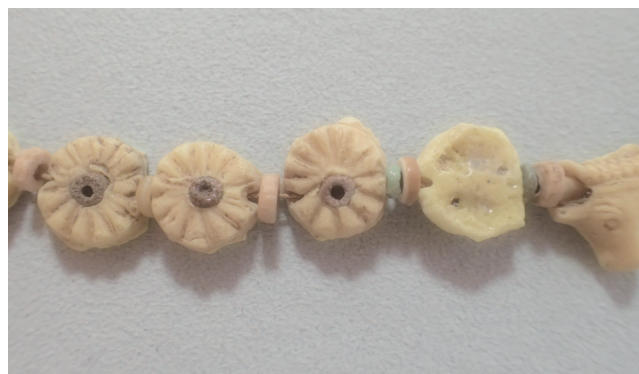


図4 実際の遺物は経年変化により硫黄が乳濁している。ビーズには横方向に紐孔が開けられている（筆者撮影）



図5 オリーブ油を塗布した土製型（花型）に硫黄を流し込み、硫黄個化後、型から外した（筆者撮影）



図6 型から外した直後 針金とバリがついている（筆者撮影）

結晶化が始まり、10分後には透明黄色の結晶になり、1日経過後は白濁した¹²。さらに、この結晶を削り出そうと試みたが、結晶中に存在する節理（筋目）が存在するため削る方向には制約があることが分かった。つまり、花形や牛の顔形などの細かな彫刻を施すことは非常に難しい。

したがって、熱を加えて溶解した硫黄を、あらかじめ作成した型に流し込み成形することを次の目標とした。まず文学部山花研究室にて花形と牛の顔形の土製模型を作り、その模型を粘土板に押し当て型を取って成形した土製型を作成した。それを使って工学部秋山研究室で硫黄の流し込みを行った（図5,6）。初回の実験では土製型の深さが深すぎて型離れが大きな問題となった。そこで、2回目にはAENETコレクションの遺物を（株）アビストの協力を得て3Dスキャンにより計測を行った後、秋山研究室にて花形、牛の顔形、そしてバス神顔形の実寸大の複製品をシリコンで作成した。その複製品をもとに石膏を使った改良型を作成し、硫黄の流し込み実験を行った。型離れの問題は若干改善したが、この

実験より型には離型剤が必要であることが分かった。離型剤は有機系のもが多く、古代の遺物からは検出が難しいため、離型剤はどのようなものを使用したのか不明である。候補としては植物性あるいは動物性の油、ロウ（蜜蝋）などが考えられるため、今回の実験では古代からの利用が確認されているオリーブ油を使用した。

硫黄の融点は α 硫黄（斜方）で 112.8°C 、 β 硫黄（単斜） 119.6°C で、個化するとモース硬度2.0の黄色結晶を呈する。古代エジプトでは、新王国時代（紀元前1550年～1070年頃）よりすでに1000度以上の高温炉を使うガラスや金属精錬などの技術が確立されていたことを考えると、硫黄は金属などと比べれば非常に低い温度で溶かして鑄型に流し込み製品を作ることができる。鑄型さえあれば、家庭の炉端でも作ることができるものである。実験では、なるべく古代の製作方法に近づけるべく、アルコールランプを使用し、試験管に入れた粉末の硫黄を溶かすところから始めた。粉末の硫黄が酸素と反応して液体に変化した頃合いを見計らってあらか

じめオリーブ油を塗布しておいた型に流し込み、紐通し穴を作るために型の上に針金を置いて固化するのを待った。その後、型から外し、型からはみ出したバリを手で外して完成である(図6)。

硫黄は単体では無臭である。しかし、水素や酸素と反応すると独特の卵の黄身が腐ったような匂いがする。AENET 収蔵品の硫黄ビーズは作成されてからすでに約 2000 年経過してはいるものの、硫化物独特の刺激臭は消えない。果たしてこのような匂いのするものを日常生活で身につけていたのか、大きな疑問が残る。古代エジプトにおいて黄色は、常に王や神などの神聖な存在と結びつけられており、『難破した水夫の物語』では、神の肌は黄金色であると明言されている。そのため、黄土や鶏冠石、雄黄などは古王国時代より壁画や碑文などの彩色に使われ、新王国時代以降は人形棺の地色としても使用されるようになった。黄金の安価な代表品としてこれらの顔料が使用されたのである。同様に、硫黄も黄金の代用色として使われたと仮定した場合、神殿儀礼というよりは葬送儀礼、それも王や王族などの社会の支配階級の人たちのための儀礼ではなく、比較的裕福ではあるが黄金でミイラを飾ることができない一般の人々のための葬送儀礼に使われたと考えるのが妥当ではないかと思う。

さて、それでは硫黄ビーズ製ネックレスは本来はどのような形だったのだろうか。古代エジプトの人々が身につけていた装飾品で、主に頸から胸元を飾ったのはネックレス、ペンダント、チョーカー、ペクトラル(胸飾り)である。このうち、チョーカーは主に古王国時代の女性が身につけたもので、硫黄の例は皆無であるため、検討対象からは外す。そして、ペクトラルは王朝時代を通じて使用されるが、胸に当たる部分には大きな矩形の装飾板が付けられるのが常であるため、これも今回の検討からは外す。したがって残る可能性は、ネックレスかペンダントであるが、ペンダントは連の中心となる大きなペンダントヘッドが付けられるのが常である。本稿の考察対象は小型ビーズのみで、ペンダントヘッドとなるようなものの存在がない。そのため、硫黄ビーズで作成したものはネックレスではないかと推測し、これより検討を行う。

ネックレスには1本の紐にビーズを通した1連のネックレスと、何連ものネックレスをつなぎ合わせ胸元から肩先までを覆う広襟形(古代エジプト語でウセク、またはウェセク)(図



図7 ウセク形広襟飾り(古王国時代 ポストン美術館所蔵 筆者撮影)

7)のものがある(本稿では広襟飾りと表現する)。特に広襟飾りは古代エジプトの埋葬には必須の要素である。広襟飾りは伝統的に神(あるいは神となった死者)が身につけるものとみなされており、墓の副葬品として時に何枚も棺に納められた。ビーズ列を3~5連つなぎ合わせて作るのが一般的だが、前述のハピ・メンの棺に表現された広襟飾り(図2)のように14連あるいはそれ以上のももある。広襟飾りには多くの場合、ファイアンス製管ビーズが使われているため、一度に出土するビーズの数は膨大である。比較的大きなビーズが使われた広襟飾りを想定しても、比較的多くのビーズが一度に出土することになる。本稿で考察する硫黄製花形ビーズの場合、直径が1.2cm前後であるため、肩まで覆う広襟飾りを作る場合は花形ビーズが約200個必要である。一方、1連のネックレス(60cm)を作ると仮定すると、約78個の花形ビーズが必要である¹³。

本稿の研究対象である硫黄製ビーズの類例の総数は342個であり、1連のネックレスにしては多すぎる。数連のネックレスか、あるいは多連の広襟飾りであった可能性が高い。図8に今回の実験で作成した実寸大の復元ビーズを使用した復元作品を示した。1連のネックレスのビーズ総数は79個、うち花形が55個、牛の顔形が23個、バス神の顔形が1個である。広襟飾りの総数は199個、うち牛の顔形ビーズは59個、花卉形は140個である。それぞれのビーズの数は表1のビーズ割合とほぼ合致するように作成した。図8左のように1連のネックレスを複数作成した可能性もあれば、図8右のように大量のビーズを使用した広襟飾りを作った可能性が見込まれる。いずれの可能性もあるのだが、1連にしる、



図8 2パターンの硫黄製ビーズネックレスの推定復元 1連（左）と広襟飾り（右）（筆者撮影）



図9 広襟飾りのビーズには上下に紐孔が付けられている（メトロポリタン美術館所蔵 筆者撮影）

広襟飾りにしろ，復元する際に直面する問題がある。

本稿の考察対象の硫黄製ビーズの本体側面には，紐孔が横方向に開けられている（図4）。この紐孔によりビーズを連結することができるが，実際に装着した際にはビーズが回転して表側が隠れてしまうため，日常生活の装身具としての役をはたさない。古代エジプトの王朝時代のビーズには連結したときに表裏が揃うようにビーズの上部と下部に紐孔をつける例が多い（図9）。しかし，硫黄製ビーズのネックレスが実用品として使用されない場合—例えば墓の副葬品，あるいはミイラの上に直接置く装飾品—であれば，ビーズの紐孔を上下につけて糸で繋げ，面的に整える必要もないだろう。

以上，本学 AENET コレクション所蔵の硫黄製ビーズネックレスについて，歴史的な考察と科学的な分析を踏まえた上で復元実験を行い，硫黄という古代エジプトにおいて非常に珍しい素材で作成したネックレスがプトレマイオス朝時代からローマ属領時代初期（紀元前3世紀頃～紀元後2世紀頃）のものと推定されること，そして多連の広襟飾りであった可能性が高いこと，さらに日常生活の中で実用品というよりも副葬品として墓に納められた可能性が高いことを導き出すことができた。

III. 「文理融合」の教育的効果と今後の展望

物質文化を研究する際には，考古学的な形態分類（型式

分類)の手法は不可欠であるが、同時に物質そのものを科学的に解明する「科学の目」も必須である。今回の秋山研究室との共同研究によって、互いを補完し合う学際的な研究の例を示すことができた。文系・理系の両者の見解が車の両輪のように連結して動くことによって、古代社会への理解が深まると確信している。

そしてこの共同研究に際しては研究者(教員)だけでなく、大学院生や在生も研究の遂行に大きな役割を果たしている。本研究は学生の知的好奇心を刺激し、協力して謎を解明することの楽しさ、そして新たな分野への興味を引き出すことに成功した。在校生にとって、大学内で文理融合の共同研究を行っていることが新たな学びの機会となっており、2016年度以降、文学部の関連科目を履修する理系の学生の数が増えている¹⁴。2018年度から施行される新カリキュラムには、アクティブ・ラーニング型の科目が補強されており、これまで以上に多くの学生が文理融合研究の機会に恵まれると期待している。

「人類の遺産」である古代遺物を所有する本学は、これらを次世代に伝えていかなければならない義務を負っている。これらを活用し、情報を発信する大学側と受け手となる国民双方に恩恵のあるプロジェクトを遂行するためには、まず、大学が所蔵している文化財とその修復保存活動に対する認知度を上げる必要がある。そのためには今回のような学内での活動の振興を図り、文化財を所有する大学の理想的な姿を作り上げていくことが肝要であろう。

注

- 1 東海大学総合研究機構プロジェクト「東海大学所蔵古代エジプト・パピルス文書の修復保存・解読・出版にかかわる国際プロジェクト」2013～15年度 研究代表北條芳隆, 主要成果: Jasnów, R., Manning, J., Yamahana, K., and Krutzsch, M., *The Demotic and hieratic papyri in the Suzuki Collection of Tokai University, Japan*, 2016, Lockwood Press, USA, をはじめ, 書籍3冊, 国際会議4回, プロジェクトDVD, 遺物目録HPなど多数の成果を挙げた。略称パピルス・プロジェクト。
- 2 カイマー(Keimer)は、ルーヴル美術館の類例について言及している(Keimer, 1939, p. 208)が、ルーヴル美術館の収蔵番号を照会したところ、その番号には全く違う遺物が登録されていることが判明した。今回はルーヴル美術館での現地調査はできなかったので、考察の対象からは外すこととした。
- 3 ネックレスとは、小さめのビーズを紐により多数繋げて作る装飾品のことで、大きめのペンダント・トップビーズを

一つ胸元に配するように紐でつなげた装飾品をペンダントと呼ぶ。ただし、ペンダント・トップとネックレスが一つになったものもあり、それらはペンダント・ネックレスと呼ぶ。

- 4 所蔵番号はないため、図録名と図版番号を記す。羽原恵子監修・編集『古代ガラス讃歌 羽原コレクション+松島巖 矢野太昭』KOBETONボ玉ミュージアム 2015年 図録7頁。
- 5 ハビ・メンの人形棺 ダブロフ家ファミリー・トラスト所蔵 ボストン美術館寄託展示。
- 6 ボストン美術館所蔵番号 21.10560。
- 7 古代エジプトの物質文化および埋葬形態はローマ属領時代の初期(紀元後2世紀頃)までは維持されるが、その後キリスト教の浸透による埋葬形態の変化によって、墓への副葬品が極端に少なくなり、ビーズなど装飾品がほとんど出土しなくなるため、本稿で考察しているビーズの時代幅の下限は紀元後2世紀頃となる。この年代はキリスト教がエジプト社会に浸透した時代に当たる(山花, 2015, p. 119)が、絶対年代で表記していないのは、果たして何帝の時代まで古代エジプトの物質文化が保持されたのか、明らかではないためである。
- 8 タニスのデフェネ地区の発掘にて、フリンダース・ピートリーは香料とともに硫黄塊を発見している(Petrie, 1888, p. 75)。また、バダリ近郊にて硫黄製品が7個発見されたが、時代については研究者によって3000年ものずれがある(Keimer, 1939, f(2))。
- 9 目の翼状片(ptyergium)の治療には赤鉛1, アラビア産の木の粉末, アポロノポリス・パルヴァ(コプトオス)産の鉄1, カラミン, ダチョウの卵1, 上エジプトの硝石1, 硫黄1, ハチミツ1をよく混ぜ合わせ、目に湿布することと記されている(Bryan, 1930, p. 101)。
- 10 本「研究の峰」プロジェクトは、工学部応用化学科秋山泰伸教授, 工学部材料科学科宮沢靖幸教授, 工学部材料科学科葛巻徹教授と文学部アジア文明学科山花京子(筆者)とその研究室が中心となり、学内の文化財を保存し、有効活用するために共同で立ち上げたプロジェクトである。この「文理融合」の共同研究はさらに発展を続けており、東海大学高度物性評価室やイメージング研究センターとのコラボレーションなどを通じて単に遺物の保存修復だけではなく、古代から人類が連綿と積み上げてきた技術史の解明が進みつつある。今後、様々なジャンルの学会にて研究発表を行うことによって、研究に学術的評価がなされることを期待している。
- 11 X線回折分析とは、対象物(結晶)にX線を照射することによって結晶格子に当たったX線が回折するが、その回折角度の違いによって結晶内部で原子がどのように配列しているかを決定する分析方法である。この分析は秋山研究室が、工学部材料科学科の葛巻研究室に依頼して行った。
- 12 秋山研究室大学院博士課程前期2年生(レポート作成時は1年生)横山知則氏の「作成した硫黄結晶の時間経過による結晶形の変化」報告書による。
- 13 実際には花形ビーズだけではなく、牝牛形、ベス形など他の形も存在するため、ビーズの推定総数は多少ちがったものになる。
- 14 筆者が担当している「古代エジプト文明」, 「外国考古学地域研究講義c」および「外国考古学地域研究演習c」の授業

では、年々理系学生の割合が増えており、例えば2015年には工学部所属の学生は皆無だったが、2017年度は履修者全体の15%を占めるほどになっている。

参考文献

Bryan, C., (1930), *Ancient Egyptian Medicine, the Ebers Papyrus*, Ares Publishers, Inc., Chicago

Keimer, L., (1939), "Perles de collier en soufre foudu," *Annales des Services du antiquités*, XXXIX, pp. 203-8

Petrie, W.F., (1888) *Tanis, Part II Nebesheh (Am) and Defenneh (Ta-phanhes)*, The Egypt Exploration Fund, London

山花京子 監修 (2015) 『悠久のナイル ファラオと民の歴史』
東海大学・横浜ユーラシア文化館編集 東海大学出版部

コア・プロジェクト「森里川海研究」の方向性

—環境 QOL の導入の一試論として—

平野葉一*1, 中嶋卓雄*2

(*1 東海大学文学部ヨーロッパ文明学科教授, *2 東海大学情報教育センター教授)

〔研究報告〕

I. 序—問題提起

文明研究所では 2017 年度のコア・プロジェクトの一つとして「里山再生（森里川海研究）プロジェクト」を設定している。これは環境省および熊本県との連携プロジェクトの一環で、2016 年 4 月の熊本地震の復興を視野に入れた環境研究である¹。「森里川海研究」とは環境省が主導する研究・教育活動の一つで、森から川を通して平地部および海までの自然環境の保全を総合的に考えることを目指す。それ故に、本プロジェクトは、阿蘇草原から白川などの河川を通じて熊本平野や河口部、有明海に至るまでを対象に、震災後の環境再生、保全および今後の防災、減災を対象とした研究となる。

環境問題は、今日の地球規模的な諸問題の中で最も注目すべき一つである。例えば地球温暖化に代表される気候変動は、異常気象による早魃や集中豪雨に伴う洪水というように我々の日常生活にも大きな影響を与えている。最近では火山の噴火や地震の頻発も見られる。とくに、熊本地震では自然環境への大きな被害も見られたが、同時に多くの人的被害も被った。地震は、本来は人為と離れた自然の現象である。しかし、人間社会にもたらす被害を考えると、自然環境の変化に対する日常的な理解や対応は、防災、減災という視点からも重要である。それ以上に、人間が自然環境にどのように対峙し、共存していくのかは、今日に課せられた課題である。

2017 年度のコア・プロジェクトでは、上のような観点から今後の方向性について検討し、阿蘇草地から熊本平野および河口域に至るまでの水循環を主たるテーマとした。とくに、自然環境—およびそれがもたらす自然災害—について考える上では、環境と人間営為の関係、人間による環境の把握についての検討が不可欠となる。プロジェクトの具体的な活動は 2018 年度からになるが、本報告では、プロジェクトを進める

上での前提となる状況や、今後の活動の方向性について提示する。とくに、人間にとっての環境の在り方を問い直す意味で、指標としての“環境 QOL”なる概念を導入してその意味について検討する。

本来、自然環境と人間営為は複雑に絡み合っていると考えるのが妥当である。現在の自然環境の変化がどの程度人間営為に起因するかは不明であるにしても、その原因の一端が科学技術文明を推し進める現代社会の構造そのものにあることも確かである。本プロジェクトでは熊本の事例を参考に、人間の環境との共存についての将来的展望の提示を目指す。

II. 第一の前提—自然の変化と人間営為

現代文明が科学技術に根ざして展開してきたことはいまでもない。一方で人間社会に快適さ (comfort) をもたらしてきたテクノロジーは、他方では温暖化や海洋汚染、放射能汚染など、自然環境を阻害してきた。すなわち、人間営為それ自体が、ときには自然から何かを搾取し、ときには自然を破壊してきたのである。現在の人間生活そのものを否定するわけではないが、人間社会と自然の関わり、すなわち人間が自然という環境の中でどのように社会を形成してきたかは、常に我々が意識しておかなければならない問題である。

これはある意味ではテクノロジーの功罪である。テクノロジーの進展は知らず知らずのうちに人間を反自然的存在へと向かわせる。例えば、人間はコンクリートに囲まれた都市を形成し、高層ビルを建築し、そこに居住し活動する。人間が最も安定する状態は地面に接していることである。したがって、数十メートルを超える高層階での居住は、建物の存在を無視すれば、自分がその高さだけ地上から離れた空間に位置することを意味する。すなわち、人間は自然に反して存在することになり、位置エネルギー（重力エネルギー）を考えれば、その危うさはいまでもない。これを可能にしているのは高度に展開したテクノロジーであり、それは暴風雨や地震を想定してさまざまな対策を講じ、高層ビルでの居住を可能

にする。上は一例に過ぎないが、このようにして地球上の75億人の人々が常に自然と対峙して人間社会を形成してきたのである。

ところが、自然は果たして人間の想定範囲におさまるとは限らない。自然の変化、とくに大規模で急激な変化は、我々にとって大きな圧力となり、ときには災害として被害をもたらす。すなわち、自然の変化は人間社会にとっては“負の要素”となり得るのである。人間はその事実と絶えず向き合わなければならない。人間のテクノロジーが高度に展開すればするほど、我々は反自然的存在の度合いを増して自然に立ち向かい、自然の変化—ときには脅威—に 대응しなければならないのである。

自然災害の一つである地震について考えてみる²。地震は、長い時間的スパンの中で生じる自然の営みである。いかに地球の自然の姿（形態）が破壊され、いかに影響がもたらされようと、それは地球にとっては46億年の歴史の中で繰り返されてきた“通常の”変化である。それは地球に息づく生物にとっても同様である。地震は“自然の攪乱”（natural disturbance）であり、同時に“生態系の攪乱”（ecological disturbance）をもたらす。すなわち、巨視的に見れば、地球の活動によって生態系の消滅、再生および新たな創造が起こり、そこから自然における新たな生態系の形成が生じる。生態系における個々の生物という点からみると、こうした自然の攪乱に対しては、それぞれがどのような形で自然と接しているか（暴露（exposure））、どの程度自然の攪乱に耐え得るか（脆弱性（vulnerability））が問題となる。また、自然変化によって一旦は阻害された生物がどの程度もとの状態に復帰し得るか（復元性（resilience））も重要である。いうなれば、地震という地球の変化とそれに伴う生態系の変化は、それ自体が全体として自然のメカニズムの一つなのである。

他方、人間活動という点からすると、地震は人命の喪失や構築物の破壊など人間社会に多大な被害をもたらす、その意味では地震は人間社会にとって“負の要素”—有害事象（hazard）—であり、いわゆるリスクとなる。人間が自然の中で“人為的”に社会を構成し、生活しているからである。人間が自然の中に進出—ときとして自然を侵食—して生を営む以上、自然の攪乱（自然の変化）と対峙していくことは必然である。したがって、人間社会も生物種と同様に、生活の場がどの程度自然と接触しているか（暴露）、生活基盤がどの程度

自然の変化に耐えうるか（脆弱性）、震災からどのように立ち直るか（復元性）が問題となる。

しかし、人間社会の場合は生物種とは異なる。それは、人間社会が自然を切り開いて形成されてきたからである。原初の時代は、人間はおそらく他の生物種と同様に、ほとんど自然の一部として存在していた。したがって、自然の変化にはただ身を任せるのが精一杯であったはずである。やがて人間は自然の一部を切り開いて里山を築き、集落を形成し、農地を耕して自らの営みを進めてきた。また、技術や産業を展開させて都市文明を築き、社会インフラの整備のために自然を切り崩して道路やダムを建設してきた。それでも、人間はときには自然を審美的な観光資源として活用しよう試みる。しかし、そのための施設整備もまた自然を切り開いて行ってきた。すなわち、人間は自然の本来の姿を奪い、自らの生活のために自然を改変してきたのである。それだけに、人間の生活空間は自然に対して暴露の状態にあり、同時に脆弱性を有する。そして、復元性という点では、震災からの復興は都市部ではインフラ復興—人間が生活する上での社会基盤つまりは人間の生活基盤の復興—を意味する。それは、反自然的行為をさらに増長することも事実である。

上で述べた自然に対する暴露、脆弱性を考えれば、自然の変化は人間に大いなる脅威をもたらす。ましてや人間営為が自然を蹂躪するがごとく展開する現代にあっては、本能を剥き出しにした自然のしっぺ返しにはただ慄くばかりである。しかし、人間は自然に対する対処法をも検討するだけの英知を備えている。現在では、人間営為と自然環境との関係性についてさまざまな視点から検討がなされている。地球温暖化や環境汚染といった人間営為にも起因する自然の変化に対しては、その行為を自制する試みが続けられている。地震のような自然変化に対しては、それ自体を防ぐことは難しいが、被害をいかに最小限に食い止めるかに着目し、防災や減災の対策が講じられているのである。

我々は、自らを取り巻く自然について常に検討しなければならない。本来、自然は自己浄化能力を有している。“自然の攪乱”もまたその一部なのである。しかし、人間営為が自然のキャパシティを超え、不可逆的な範囲にまで展開してしまうときに、人間の能力は地球が有する“復元性”を肩代わりできるのであろうか。その意味で、我々は自らの文明を再認識する時期にきていると考えざるを得ない。すなわち、地球規

模での持続可能性 (global sustainability) の重要性に対する再認識が求められているのである。

Ⅲ. 第二の前提—地球規模での環境の再認識

地球温暖化に代表される地球規模での環境変化の検討としては、世界的にさまざまな動きが展開されている。そうした活動は、科学技術を駆使して“進化”してきた近年の人間営為がいかに自然環境を変化させてきたかについて指摘し、また、地球に対する人間活動の過度の影響に警鐘をならしている。以下では、環境問題に対する最近の二つの試みについて紹介する。

1. “Anthropocene”

2000年、ノーベル賞受賞者のクルツェン (Paul Crutzen) は、自然学者のステルマー (Eugene F. Stoermer) とともに、「人新生」(Anthropocene) という概念を提唱した³。これは現在の地球の地質学的な状況を称する概念である。現在の我々は地質学的な年代区分としては完新世 (Holocene) に位置する。しかし、クルツェンは、近年の科学技術の著しい進歩により、人間活動は地球に新たな段階をもたらしていると主張する。人類は18世紀の産業革命を境に、活動の領域を大幅に拡大してきた。実際、人間の地球資源の消費量は増大し、CO₂ や窒素酸化物の排出を増加させることで大気汚染を生じさせてきた。また、昨今では新たな化合物や原子力利用による放射性物質などの蓄積をもたらしている。これらの人間活動は明らかに地球の状況を改変し、もはや人間が自然を超える力を備え、新たな支配をもたらしている。そして、その結果は大気組成や地質などといった地球規模的なレベルに達しているのである。これまでは自然の変動が地質学的変化をもたらし、それが地層に蓄積されてきた。同様に、現在では人間営為の結果が地層にまで刻まれている。それがまさに“Anthropocene”と呼ばれる時代なのである。

クルツェンとステルマーは、この“Anthropocene”の始まりを、自ら恣意的としながらも、18世紀の産業革命に見出すとする。蒸気機関の発明による化石燃料の大量消費やそれに起因する大気汚染の始まりを見据えてのことである。また、その後の200年余りに亘って人間活動の地球への影響が顕著に見られるからである。彼らは、“Anthropocene”期における人類の継続的な繁栄がこの後何年も続くとしながら、人類

にとっての地球の危機を以下のように指摘する。大規模な自然災害、予期せぬ伝染病の蔓延、核戦争、小惑星の衝突、新たな氷河期、地球資源の継続的な搾取、等々。その中には人知が機能すれば防げるものもあるとするが、科学技術文明は将来的にも困難な課題を蓄積させている。すなわち、地球規模での持続可能な環境マネジメントこそが求められているのである。

“Anthropocene”の問題はその後も数多くの研究者に注目され、現在でも世界中の諸機関において科学的な検証、現状の把握と将来的な検討が進められている。例えば、J. ザラシーウィッツは、多少皮肉的ではあるが、次のように指摘している⁴。何万年か後には、今日我々が“Anthropocene”と呼ぼうとしている地層からはコンクリートやプラステティックをはじめ、本来は自然界には存在しなかった新たな化合物や放射性物質の痕跡が見出されるであろう。また、遺跡としては、鉱石採掘のために掘った鉱山の坑道や都市の地下鉄の跡が残される。そして、発掘された人間の骨には、人工弁や人工関節が人間の技術の証を物語るのである。

上で述べたことはそれだけでは問題ではない。むしろ、問題となるのは、地球環境の変化をもたらした原因である。地層の調査から恐竜の絶滅が氷河期の到来や巨大隕石の衝突によるとされているように、もし遠い将来に“Anthropocene”の終結が人間の科学技術によると推測されることがあるとすれば、それこそが問題なのである。その意味で、“Anthropocene”という概念は現代文明への警鐘とも理解することができる。

2. “Planetary Boundaries”

もう一つの動きは、スウェーデンの Stockholm Resilience Center のロックストローム (J. Rockström) のグループが提唱する“Planetary Boundaries”である。彼らは2009年に発表した論文の中でそのアイデアを示している⁵。

前項の“Anthropocene”でも指摘したとおり、科学技術に根ざした現代文明は益々自然への負荷を増加させている。その結果が、地球温暖化などの気候変動や生態系の危機的変化を生じさせている。ロックストロームはこうした状況に対して次のように指摘する。Holoceneの間は、「環境は自然の中で変化してきた」。その変化は地球システムのキャパシティの範囲で生じてきたし、その豊かな自然環境が人間の発展を

可能にしてきた。しかし、人間の科学技術は、一方では人間に生活の豊かさを提供しながら、他方ではその過度の展開によって地球のキャパシティを超える負荷—地球が復元性(resilience)を保てる以上の負荷—を与えてきたのである。

こうした観点から、ロックストロームは以下の9つのプロセスを挙げ、地球システムの境界—人間が地球上でスムーズに活動できる境界—について検討している。

- Process 1 気候変動 (Climate change)
- Process 2 海岸の酸性化 (Ocean acidification)
- Process 3 成層圏オゾンの減少 (Stratospheric ozone depletion)
- Process 4 窒素およびリンの循環 (Nitrogen and Phosphorus cycle)
(4a - Nitrogen cycle (part of a boundary with the Phosphorus cycle))
(4b - Phosphorus cycle (part of a boundary with the Nitrogen cycle))
- Process 5 地球規模での淡水利用 (Global freshwater use)
- Process 6 土地利用変化 (Change in land use)
- Process 7 生物多様性の減少速度 (Rate of biodiversity loss)
- Process 8 エアロゾルの負荷 (Atmospheric aerosol loading (not yet quantified))
- Process 9 化学物質による汚染 (Chemical pollution (not yet quantified))

これらの9つのプロセスには、「気候変動や海洋の酸性化のように、もともと大陸・地球規模のものと、淡水利用の変化や土地利用変化のように、元来は局地的、地域的なプロセスだが多くの場所で同時に起こることにより地球規模での問題となるものに分けられる」⁶。ロックストロームは、地球システムがキャパシティを超えず人間が安全に活動できる範囲として、それぞれのプロセスにおける数量的指標と閾値を設定している(ただし、領域8と9に関しては未決定としている)。

ロックストロームは、結果として、プロセス1とプロセス7およびプロセス4aについては既に地球の境界を超えていると結論づけている。プロセス1の気候変動に関しては、温暖

化の要因である大気中のCO₂濃度と放射強制力の増加が非可逆的なレベルに達しているという懸念を指摘している。また、プロセス7の生物多様性の減少は他のプロセスと密接に関わっている。生態系の機能は地球環境の維持に大きく関わる。したがって、生物多様性の減少や損失は陸地および海洋の生態系の脆弱性を増大させ、気候変動や大洋の酸性化といった自然環境の脆弱性を増大させる。さらにプロセス4aの窒素循環では、農業肥料などを含めて産業が排出する窒素化合物の増大が生態系の復元力を弱めることになる。

もちろん、これらのプロセスのうち一つだけを取り上げて境界を議論することは適当ではない。9つのプロセスが相互に関連しあって地球環境全体を構成しているからである。例えば、プロセス5(淡水利用)およびプロセス6(土地利用)は、人間の活動範囲の拡大を意味する。人間が居住地や耕地を広げることでより多くの陸水を使用することは、生態系の喪失や地下水脈の枯渇を生じさせる。また、肥料使用量の増大といった懸念もあり、それは生態系の喪失にもつながる。それだからこそ、人間営為と自然のキャパシティのバランスが検討されなければならないのである。

この論文において、ロックストロームは“Anthropocene”についてはふれていない。むしろ、今日の間人間営為がHoloceneの維持を阻害していることに警鐘を鳴らしているのである。Planetary Boundariesが提示する閾値とは、地球環境にとって復元性を失うほどの非可逆的变化が生じないための一つの境界であると考えられる。そこでは、人間が個人としても、集団としても、地球環境の維持にどのように立ち向かうかが求められているのである。

IV. 地球環境を捉える視点の検討

1. 環境の捉え方に対する一つの問題提起

人間の文明は一つの岐路に立っている。地球規模での持続可能性を考える上では、次の二つの命題を考える必要がある。

「人間は自らの生活(すなわち文明)の維持、および、さらなる進歩を求める。」

「人間は自らを取り巻く自然環境を保全し、維持することが求められる。」

これらの命題は本質的には相反する要素を内包する。実際、18世紀以降のテクノロジーの進歩による文明の展開が自然環境を阻害し種々の問題を生じさせてきたことは否めない。その一方で、これら二つの命題が密接に関連していることも事実である。ロックストロームが指摘するように、Holocene期の自然環境は人間の文明の高度な発展を可能にした。しかし、現代文明の発展にも起因する現在の気候変動は、人間社会に自然災害として多くの被害をもたらす、人間はその対応に躍起になっている。ここに新たな課題—人間は自然環境を維持しながら、いかに自らの生活を進歩させるか—が生じる。この場合、“進歩”は必ずしも科学技術的な進展だけを意味しない。むしろ、「人間が快適さや豊かさ (comfort) を伴った生活を保てるか」を意味する。したがって、「人間生活の豊かさ」と自然環境の維持」という一見矛盾する二つの要素に対して、何らかの打開策を見出すことが急務となる。

人間にとっての生活—広い視野で考えれば人にとっての文明—の根底にあるのは、“生を営む”ことである。それゆえに、人間は本質的には生活の満足を求める。その満足は単に個人的なものではなく、社会的なもの—家族や社会全体の満足—であることが望まれる。各個人にとっては未来の社会もまた自らの生活の延長上に位置付けられ、その継続性を期待するからである。しかし、現在の社会状況が継続されることは、同時に自然環境がもたらす危険さも引き継がれることになる。このように考えると、上の二つの命題を同時に成り立たせるためには、人間自身の生活に対する価値観の中に環境への意識を取り込むことが必要になる。言い換えれば、環境保全や維持が人間生活の一部に取り込まれ、全体としての満足につながることを考えなければならないのである。

2. QOL (Quality of Life) について

前項で人間生活における価値観についてふれたが、今日生活の満足度を表す概念としてQOLがある。ここではこれを拡張して、環境を対象とした“環境QOL”を導入することを検討したい(次節)。まずはQOLそのものについて多少考察する。

QOL (Quality of Life) という概念は、今日では健康や医療に関してよく用いられる。しかし、歴史的には必ずしもそれに限るわけではない。QOLの“Life”とは、人間の“生命”であり、同時に“生活”を意味する。すなわち、一方では生死

に関わる人間の存在の根本を、他方では生きている日常の状態を表す。したがって、QOLは“人間存在や生き方の質”を意味することになる。狭義には、例えば終末期医療における患者の良好な生活状況を意味し、その向上とは、患者がたとえ死を目前としているにしても、その人間性を尊重し、満足して残された生を送れるような生活向上を目指すことになる。また、QOLは医療に限ったものではなく、広義には仕事や日常生活を含めた生活全般における“豊かさ”を意味する。上のいずれの場合においても重要であるのは、その根底に人間自らの生への満足がある点である。すなわち、“QOLの向上”あるいは“QOLを高める”とは、個人的にも社会的にも人間が人間としてそれぞれに“豊かな生”を生き、それに満足できること、あるいは、満足の状態を保つことであるということができる。

もともとQOLに近い概念が登場するのは、18世紀の産業革命の時期に遡るといわれる。中西と土井は、イギリスにおける産業革命が推し進めた都市化・工業化に伴う環境汚染や貧困の中、生活革命によって「より高い生活様式への欲求」が庶民に芽生えたと指摘する⁷。その結果、「個人の期待と現実の生活の差に依存した」ものとしてQOLの考え方が登場するとしている⁸。また、この結果として公衆衛生など社会環境の整備も進められたという。ここで、implicitであるにしてもQOL概念の萌芽が18世紀の産業革命に見出されることは興味深い。これは、クルツェンらが提唱する“Anthropocene”の始まりと呼応する。すなわち、科学技術文明が環境へ影響し始める時期には、既に人間生活の豊かさや満足の議論が内包されていたことになる。

その一方で、今日よく知られているように、QOLの概念を導入したのはアメリカの大統領ニクソンであった。これに関しても中西と土井は次のように指摘している⁹。すでにジョンソン大統領の時代から光化学スモッグなどの環境問題が市民の関心事となっていた。これに対し、ニクソンは大統領の選挙戦において環境改善による生活の向上を目標に掲げ、“We need a high standard of living, but we also need a high quality of life”と主張し、政策にQOLの概念を明確に取り入れたのであった¹⁰。その意味で、1970年はアメリカにとって“QOLの年”と呼ばれる。

したがって、QOLの概念としては、歴史的には先ずは人間の生活環境の充実について検討されたことがわかる。大森

のまとめ¹¹によると、QOLの定義は、1970年代には個人の生活に対する満足度や幸福感として議論され、また1980年代には保険医療分野に展開されることになる。しかし、それ以前に、人間の健康や医療に関わる分野でのQOLの確立については、WHO（国際保健機関、World Health Organization）も大きく関わっている。実際、1947年にWHOは健康を次のように定義する。

“Health is a state of complete physical, mental and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity.”¹²

この定義は、今日の健康に関わるQOLの原型といえることができる。

加えて、WHOは1990年代にはQOLについても定義を与えている（WHOQOL）。

“WHO defines Quality of Life as individuals’ perception of their position in life in the context of culture and value systems in which they live and in relation to their goals, expectations, standards and concerns.”¹³

その上で、現在ではその評価領域として以下の6領域を定めている。

- 1) 身体的領域 (Physical health)
- 2) 心理的領域 (Psychological health)
- 3) 自立レベル (Level of Independence)
- 4) 社会的関係 (Social relationship)
- 5) 環境 (Environment)
- 6) 精神性 (宗教性／個人的信仰) (Spirituality/ Religion/Personal beliefs)

さらに、これら6領域に対して26項目の評価指標を設けて、個人のQOLの度合いを測定する方法を示している。

QOLに関するWHOの定義は、健康的な人間生活という視点からの肉体的および精神的状態に対する個人の満足度、安寧感を指し、その一つの基準を提示している。しかし、QOLの歴史的展開を見てもそうであるが、一般的には“QOL

には明確な定義が存在しない”ということが妥当であると考えられる。実際、これまでの研究では、さまざまな種類のQOLが検討され、その名称も必ずしも一定ではない。例えば、土井は、QOLを健康に直接関連するQOL（health-related QOL：HRQL）と健康と直接関連しないQOL（non-health-related QOL：NHRQL）とに分類している¹⁴。WHOが定義するWHOQOLは専ら前者に相当する。他方、後者は、人間生活において医療から直接の影響を受けない範囲でのQOLということになる。また、下妻はQOLを理解する上での重要な要素は“主観性”であるとし、「QOLは人々の主観的な認識により成り立っている「心理量」である」としている¹⁵。

上での検討から考えると、「万人（人類全体）のQOL」という表現は概念としては可能であるが、必ずしも適切ではないし、実際に現実的ではない。QOLが個人というレベルでの人間生活の“豊かさ”とそれに対するある種の“満足度”を意味するからである。したがって、誰を対象とし、何を目的とするのが明確でなくてはならない。そして、これは社会の中で生きる個人にとっての“Life”の意味に関わってくる。例えば、終末期の患者にとっては最後の瞬間までをいかに生きるかがそのQOLを意味づけるのである。すなわち、各個人が自らの生を生きる上で、それぞれが意識する具体的な目標に対する満足を考えることがQOLの本質なのである。

V. “環境 QOL”の導入に向けて

1. QOL 概念の拡張としての“環境 QOL”の導入

前節でのQOLの概念をふまえ、自然環境の維持をも視野に入れた人間社会の豊かさを求める可能性について検討を試みる。

これまで見てきたように、QOLは人間生活の広い範囲に亘って導入し得る概念である。実際、現在では既にさまざまな領域におけるQOLが検討されている。例えば、宮本と坂部は“情報関連 QOL”（Information-related QOL）について検討し、その定義を「情報環境の利用者が自身の情報リテラシーを適切に活用して得られた種々の満足度や健全度」として定めている¹⁶。さらに、彼らは「情報リテラシー満足度」、「情報活用満足度」、「情報活用健全度」の3領域に対して指標を設定してアンケートを実施し、その検証を実施している。また、本研究との関連でいえば、都市化に伴う居住空間の拡大に対して経済効率化と人間生活のQOL確保に向けて、“生

活の質をもとに調整された生存年数 (Quality Adjusted Life Year) を指標とした研究も見られる¹⁷。この研究では、土木系分野についての検討から自然災害に対する“災害安全性” (Safety and Security) に関しても検討しており、ある意味で環境との関連をふまえた QOL 研究の一環と考えることができる。

さらに、QOL は広く人間を取り巻く社会的な環境に対する意味として捉えることも可能である。例えば、EU においては生活の質は“8 + 1 次元”として定義されており、その次元として、1) 所得、消費などの生活条件、2) 生産的な活動、3) 健康、4) 教育、5) レジャーと社会的交流、6) 経済的および物理的安全性、7) ガバナンスと基本的権利、8) 自然と生活環境、およびこれらに加えて、全体的な人生の経験、が挙げられている¹⁸。

これらの研究をふまえ、本研究では「人間生活の豊かさや自然環境の維持」の両立の視点からあらためて“環境関連 QOL” (environment-related QOL: 以下“環境 QOL” (eQOL) と呼ぶ) の導入を試みる。これは、人間生活 (すなわち我々の文明) の存続が地球規模的な持続可能性に支えられるという考え方を基礎とする。

人間は常に自然と対峙して生を営んでいる。その結果、人間社会すなわち人間が活動する場所の自然に対する暴露 (環境としての自然とどの程度接触しているか) と脆弱性 (自然変化に対してどの程度耐え得るか) は必然となる。そして、それ故に環境問題と自然災害は密接に関わる。しかし、その関係は、人間が自然の脅威から自らの生活を守ろうとするといった負的なものだけではない。むしろ、人間にとって大切なのは、自らが自然との共存をいかに“楽しめる”かという問題である。この“生を楽しむ”という発想こそがそれぞれの QOL に関わってくる。すなわち、与えられた環境の中で自らの生を“持続的に楽しむ”過程を通して得られた満足度や社会的妥当性が“環境 QOL”なのである。したがって、人間にとっての“環境 QOL”の向上は、同時に地球の持続可能性 (sustainability) の維持と同等の意義をもつことになる。

2. “環境 QOL” の概念構成

QOL の定義には明確な対象と目的が必要である。加えて、QOL を実質化するための構成概念と、その構成概念が適正かつ妥当であるかを判断する根拠も必要である。したがって、

環境 QOL に対しても必要な諸要素を検討することが本研究の目的となる。

人間が自然環境を考える視点は多様で複雑である。自然を人間にとっての外的で物理的な対象として見る場合には、自然は人間にとっての資源であり、人間の生存にとっての開拓の対象となる。同時に、それは人間生活の存続にとっての脅威ともなり得る。他方で、例えば海が人間にとって癒しの対象となるように、自然が人間精神にとっての拠り所となる場合もある。それは、自然が観光やレクリエーションの対象となる場合も同様である。

より根源的に述べるなら、自然はそれに対峙する人間の位置付けによって異なってくる。自然を人間の客観的对象物であると捉える立場もあるが、逆に、人間をも自然の一部であると考えられる立場もあるからである。それぞれの立場に応じて環境 QOL を考えると、以下のような視点が設定される。

[eQOL (I)] 生態系を含む自然環境に対する eQOL

[eQOL (II)] 環境に対峙する人間にとっての eQOL

ここで、[eQOL (I)] は自然環境の維持そのものを意味する。すなわち、自然環境が人間営為とは独立に維持されることに価値や満足を見出す視点を表す。また、[eQOL (II)] は、物理的にも精神的にも人間との関りの中で自然を考えることを意味する。この場合、人間にとって自然は資源などの物質的な利益を供与する対象でもある。したがって、人間は、自らの生活上の豊かさや自然環境の存続のバランスを保つことに価値や満足を見出すことになる。最終的には、これら二つを総合した立場が環境 QOL の全体を構成すると考えられる。

したがって、その概念構成は、例えば以下のような領域として設定される。

- [1] 自然の物理的状態に対する価値
- [2] 自然に対する精神的な価値
- [3] 自然からの脅威の軽減 (防災・減災)
- [4] 自然の社会的価値

ここで、[1] は一方では自然環境をあるがままの状態を維持することを意味し、他方では、人間の活用を考えて自然を維持することを意味する。ただし、人間と自然の共存—地球規

模的な持続可能性—を大前提とする。[2]は基本的には自然に対する個人の価値意識に依存する。また、人間は常に自然災害から自らの生活を守らなければならない。したがって、[3]も重要な要素となる。そして、最終的には、自然環境が人間と共存する形で維持されることに人間自身が満足することが[4]の社会的な価値意識を構成する。

一般的には、QOLは個人のある対象に対する満足度を示す。しかし、環境QOLが多少異なるのは、個人の問題に止まらないという点である。最終的には人類全体の存続のために自然環境の維持を考えなければならないからである。それでも、環境QOLに関しては、個人から集団へ、あるいは、地域から全体へとといった階層ごとの展開も考える必要がある。その階層は以下のようになると考えられる。

Step 1: 自らが住む地域の自然環境に対する価値意識や満足感

(個人から地域集合体の意識へと展開)

Step 2: ある地域の自然環境維持に対する外部の人々の価値意識や満足感

(自らの価値意識の醸成, 展開につながる)

Step 3: 各集合体の自然環境への価値意識や満足感がより広い地域で共有される

(個人→その地域集合体→より広範な集合体へと価値意識が拡散)

Step 4: いくつかのモデルの国レベルや地球規模への拡散

これらの各 Step を図示したのが【Fig.1】である。ここで、各

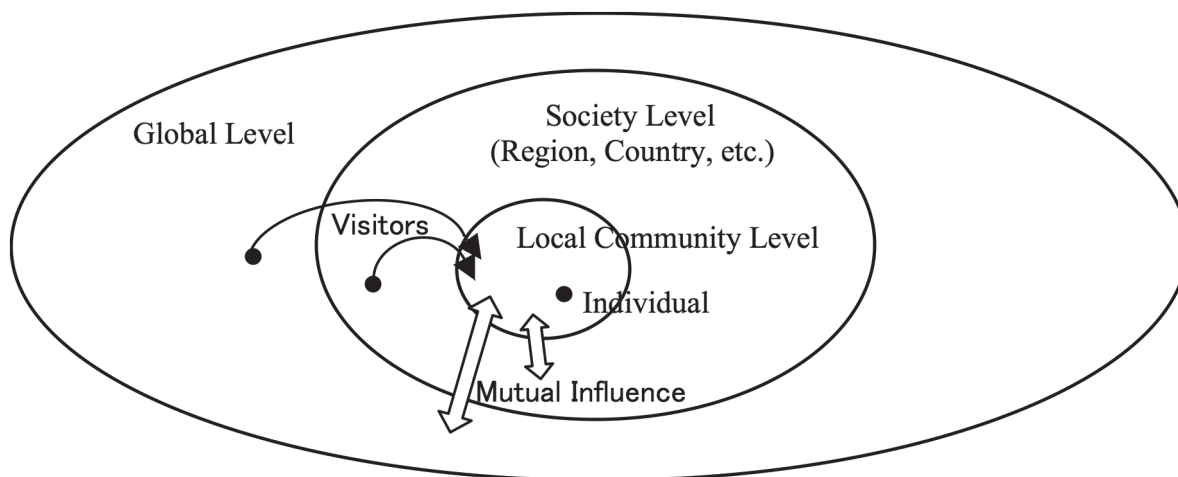
地域はそれぞれの状況において、個人的レベルあるいは集団レベルで自分の住む地域の環境について考える。それは、その地域の集団の満足度—すなわち環境 QOL—を構成する。そして、それは例えば観光や教育活動を通して外部にも影響を与える。こうして、いくつかの環境維持活動を含めた環境 QOL が醸成されていき、地域から国や地球規模への展開がはかれることになる。

今後の課題としては、上の [1] ~ [4] に示したそれぞれの構成概念に対して、より詳細な項目を設定し、アンケート調査などを通しての検証が必要となる。

VI. まとめにかえて—今後の研究の方向性

冒頭でも述べた通り、2016年4月14日および16日に熊本、阿蘇地方は大地震に見舞われた。この地震によって熊本県の各地では甚大な被害を受けたが、とくに布田川・日奈久断層を中心に断層のずれや斜面の崩落、家屋やビル、橋等の倒壊が生じ、多くの人的被害も生じる未曾有の被害となった。自然環境という点から述べると、農業遺産としても知られる阿蘇草原でも斜面の崩落や地割れが生じ、また、地下水脈系の変化による湖水の枯渇などが見られた。

こうした状況を放置することは、単に自然環境に関わるだけではなく、人間生活にも重要な影響をもたらす。例えば、阿蘇はある意味で人工的な草地であり、その環境は野焼きによって維持されてきた。したがって、震災による草原の変化によって野焼きが行えなくなることで、その維持が不可能になる。また、阿蘇草原は水資源の涵養地としての意味をもつ。したがって、阿蘇草原の性格の変化は下流域の熊本平野に



【Fig. 1】 Diffusion and Cooperation of eQOL

も大きな影響をもたらす。さらに、熊本平野を流れる白川等の河川および地下水脈系の変化も、下流域の農業などに影響を与えることが推察される。自然災害はこうした自然の実質的な活用ばかりに影響を及ぼすだけではない。それは観光などの産業にとっても同様な被害をもたらす。

したがって、文明研究所のコア・プロジェクト「里山再生（森里川海研究）プロジェクト」では、本報告で示してきたさまざまな前提や視点を基礎にしなが、熊本地震後の自然環境の保全・再生と震災復興（防災、減災）について調査し、今後の対策等について検討することを目指す。とくに2018年度においては、以下の3つの方向性を中心に研究を進める。

- (1) 阿蘇から熊本平野、河口域までの水文学研究（森里川海研究）
- (2) 生態系を含めた阿蘇草原の多様性に関する研究
- (3) 自然環境の維持に対する人々の意識に関する研究

このうち(1)と(2)に関しては生態学を含む自然科学的あるいは土木工学的な分野を中心とする検討となる。とくに、(1)は水文学を中心とする森里川海研究で、阿蘇地域から有明海までの河川を中心とする陸水について、震災の影響を含めて検討する。より具体的には、熊本県域における地下水脈を含めて水循環システムを明らかにすることを目的とし、以下の3点について調査を進める。

- ① 「阿蘇～熊本水循環連関モデル」の構築
- ② 阿蘇草地を中心とする水環境の将来的な「持続可能モデル」の提示
- ③ 熊本地域における「水循環と営農の関係」についての検討（白川・緑川の河口部の栄養塩類調査の結果を指標とし、営農（人為）と水循環（自然環境）の関係性について検討）

また、(2)は専ら阿蘇の自然環境の保全に関わる。これまでの研究からも明らかのように、阿蘇草地は水資源の涵養地としての役割を有するが、植生などの保全は草地の持続可能性にとって不可欠となる。その意味では、多様な生態系への震災による阻害は常に注意すべき問題となる。

その一方で、(3)は人文・社会科学的視点からの研究とな

る。また、環境QOLを含む。すなわち、自然は人間にとってどのような意味をもつのかという問いに対して、人間の精神的価値観についての検討を行う。同時に、自然変化（自然災害）に対する人間の対応—防災・減災—についても重要な課題として位置付け、検討を試みる。また、環境QOLに関して考えると、自然との共生をふまえた人間生活の満足度を高める指標の設定も重要となる。そのために、熊本地震をふまえてアンケート調査を実施し、自然の脅威も含めて人々の環境への意識について考察することで、具体的な指標の決定を目指す。

本研究が目指す「人間生活の快適さと自然環境の持続的可能性」の両立はそれほど簡単なことではない。人間生活は、自然に対する暴露と脆弱性から常にその脅威に曝され、それに対処を余儀なくされてきたからである。しかし、物質文明の高度な進展によってコンクリートに囲まれた都市を形成してきた人間にとって、自然災害は必ずしも負の要素となるばかりではない。それは、人間が自然と共存することの再認識の機会を提供する。例えば、2011年の東北大震災で15メートルを超える津波が押し寄せたことで、今度はそれに耐え得る防波堤を築く。しかし、次の津波がその規模にとどまる保障はない。むしろ、一方では食料資源を提供し、他方では海という景観が精神的な癒しを与えてくれた海との間に生じた隔壁は、それ自体が別な意味での“負の要素”を内包することも事実である。それだけに、人間が自然という環境の中でどのように生きるかは人間精神の内奥にも関わる問題となる。そこに文明論としての環境問題を検討する意義が見出されるのである。

注

- 1 東海大学は2018年1月17日付で環境省、熊本県との間で「阿蘇地域の創造的復興に向けた地域循環共生圏の構築に関する協定」を締結している。
- 2 自然災害に関する議論に関しては以下の資料を参照した：環境省自然環境局、「生態系を活用した防災・減災に関する考え方」、2016年
- 3 ステルマーは既に1980年代には多少異なった意味で“anthropocene”なる概念を提唱していたが、2000年になってクルツェンとともに地球規模での問題提起を行っている。クルツェンとステルマーの論文は以下を参照：
Crutzen, P. J. & Stoermer, E. F., “The Anthropocene”, *IGBP Global Change Newsletter*, 41, 2000, pp. 17-18,
Crutzen, P. J. & Stoermer, “Geology of Mankind”, *Nature*, 415 (23), 2002, pp. 23-24

- 4 Jan Zalasiewicz, "A History in Layers", *Scientific American*, 315, 2016, pp. 30-37
ここでは以下の訳文も参照した：
J. サラシーウィック, 「人類は地球にどんな痕跡を残していくのか?」, 『日経サイエンス』, 2016年12月号, pp. 63-68
- 5 Rockström, J. et al., "A safe operating space for humanities", *Nature*, 461(24), 2009, pp. 472-475
- 6 宮田明, 「論文の紹介：地球システムの境界—人類が安全に活動できる領域を探る」, 『農業と環境』, 独立行政法人農業環境技術研究所, No. 124, 2010,
- 7 中西仁美・土井健司, 「QOLに関する概念整理—政策評価やベンチマークシステムとの関連性から—」
https://www.jsce.or.jp/library/open/proc/maglist2/00039/200306_no27/pdf/119.pdf
中西・土井は以下の文献をひきながら、産業革命期の生活革命について論じている。
角山栄他著, 『産業革命と民衆』, 河出書房新社, 1975年
- 8 こうした社会の状況は18世紀末から19世紀にかけてのパリでも生じている。環境汚染に喘ぐパリでは、市税の問題もあり、城壁外で休日を楽しむ人々が登場する。
原嘉津男・平野葉一, 「パリの聖月曜日(労働と生活)」, 『文明』, 東海大学文明研究所, 第81号, 1999年, pp. 59-71
- 9 中西・土井, *Ibid.*
- 10 Richard Nixon, 221 - *Statement Announcing the Creation of the Environmental Quality Council and the Citizens' Advisory Committee on Environmental Quality* May 29, 1969
<http://www.presidency.ucsb.edu/ws/?pid=2077>
- 11 大森武子, 「QOLを目指した医療・看護」, 『経済文化研究所紀要』, 敬愛大学, 第10号, 2005年, pp. 197-208
この論文において、1970年代のQOLに関する一般的な定義の例を以下のように紹介している(萩原から引用)：
“個人の安寧観 [sense of well-being] や満足感, 幸福感”(Dalkey (1973)), “自己のニーズに対して認識する満足感”(Mitchell (1973)), “物質的な安寧のみならず教育や余暇などを含む自己を取り巻く状況への満足感”(George (1975))
萩原勝, 「日本人のクオリティ・オブ・ライフ」, 至誠堂, 1978年, pp.3-4
また、1980年以降の保健医療に関する定義に関しては以下の例を紹介している(黒田から引用)：“人生を価値あるものにさせる満足の総体”(Smith (1983)), “日常的な能力, 社会的な役割, 知的活動の実現から得られる満足感”(Wenger (1984))
黒田裕子, 「クオリティ・オブ・ライフ (QOL) その概念的側面」, 『看護研究』, Vol. 25, No. 2, 1992年, pp. 98-106
- 12 "CONSTITUTION OF THE WORLD HEALTH ORGANIZATION", Basic Documents, Forty-fifth edition, Supplement, October 2006)
http://www.who.int/governance/eb/who_constitution_en.pdf
- 13 "WHOQOL Measuring Quality of Life" (1997)
http://www.who.int/mental_health/media/68.pdf
- 14 土井由利子, 「総論—QOL概念とQOL研究の重要性」, 『保健医療科学』, 53 (3), 2004年, pp. 176-180
- 15 下妻晃二郎, 「QOL評価研究の歴史と展望」, 『行動医学研究』, Vol.21, No.1, 2015年, pp. 4-7
- 16 宮本和明・坂部創一, 「情報化社会における情報関連QOL指標の開発」, 『日本社会情報学会全国大会研究発表論文集』, 22 (0), 2007年, pp. 186-189
- 17 加地範康・加藤博和・林良嗣・森杉雅史, 「余命指標を用いた生活環境質(QOL)評価と市街地拡大抑制策検討への適用」, 『土木学会論文集D』, Vol.62, No.4, 2006年, pp. 558-573
- 18 EUにおけるQOLに関しては以下を参照した：
Eurostat (Statistics Explained)
http://ec.europa.eu/eurostat/statistics-explained/index.php/Quality_of_life

本誌への投稿について

1. どなたでも自由に投稿できます。
2. 原稿は本誌の目的（『文明』創刊にあたって」（創刊号に掲載）をご参照下さい）に沿った論文または研究ノートなどで、未発表のものにかぎり
ます。
3. 原稿の体裁
 - ①邦文の場合：20,000字以内（研究ノートは16,000字以内）、原則として図表は刊行の際のスペースを本文の字数相当に算入してください。他に英文サマリー300ワード。
 - ②英文の場合：8,000ワード以内（研究ノートは6,400ワード以内）、原則として図表は刊行の際のスペースを本文のワード数相当に算入してください。他に邦文サマリー500字。いずれも、本誌の「執筆要項」に沿った形でご提出下さい。
4. 投稿原稿の採否は、編集委員会の委嘱する査読委員の審査に基づき編集委員会が決定します。原稿は採否にかかわらずお返しいたしません。
5. 発行：年1～2回
6. 「執筆要項」は、東海大学文明研究所のホームページより、ダウンロードできます。

東海大学文明研究所

神奈川県平塚市北金目4-1-1 〒259-1292
連絡先：湘南校舎F館2F 文明研究所
電話：0463-58-1211 (EXT 4900, 4902)
FAX：0463-50-2050
E-mail：bunmei@tsc.u-tokai.ac.jp

文明

Civilizations

No.22 2017

編集 委員長 山本和重
委員 田中彰吾
馬場弘臣
山花京子
五十嶋みゆき

発行日 2018年3月31日
発行者 山本和重
発行所 東海大学文明研究所
神奈川県平塚市北金目4-1-1 〒259-1292
Telephone: 0463-58-1211 (EXT 4900, 4902)
Facsimile: 0463-50-2050
E-mail: bunmei@tsc.u-tokai.ac.jp

制作 東海大学出版部
神奈川県平塚市北金目4-1-1 〒259-1292
Telephone: 0463-58-7811
Facsimile: 0463-58-7833

データ作成 港北出版印刷株式会社

※本誌からの無断転載を禁じます。